

ことばとの旅

クラスメートから知ることばと人の関係

2018 年後期 日本語教育論Ⅱ・2
レポート集
Web公開版

京都大学
人間・環境学研究科/総合人間学部
担当 牲川 波都季

目次

ことばを学ぶ，世界の一部になる —「日本語話者」として生きるセツさんとのインタビューをもとに—	キム ダソム p.1
言語との長い「付き合い」から	薛 楽 p.7
李宣さんのことばの旅—手段としての言語—	清水 友登 p.13
「好き」な言葉	李 宣 (LI XUAN) p.17
「当たり前」のことば	段 洵美 (DUAN XUNMEI) p.22
言葉に対する印象とその変化	三津 海童 p.27
ことばとの出会い—複数の言語を話す私たち	張 心悅 p.51
ことばに対する思いの重要性	青木 純也 p.57
自主性とオリエンタリズム	畠中 博晶 p.64
「ことばとの旅」—変化していくことばへの気持ち	沈 嘉軼 p.67
まとめのことば	牲川 波都季 p.73

ことばを学ぶ、世界の一部になる

—「日本語話者」として生きるセツさんとのインタビューをもとに—

1. はじめに

人は誰もがそれぞれ自分のことばを持っている。中には「日本語」や「英語」のように名前を持ち、話者の多い言語はもちろん、文字化されていない言語や、狭い地域でしか話されないような方言、手話言語のように特殊なものとされる言語もあるだろう。当然のことながら、一人の人間がたった一つの言語を持っているとも限らない。すぐ想像がつくように、外国語の学習をしている人もいれば、普段はある地域の方言を話す、場面や相手によって標準語や公用語を話す人もいるのである。それでは個々人の中で、「ことば」とはどのように得られ、形成されていくのだろうか。我々は日々、当たり前のようにそれぞれのことばを用いており、そのため、こういった問題についてあまり考えないことが多い。本稿では、京都大学の中国人留学生、薛楽さんとのインタビュー内容をもとに、彼女の「ことばの旅」を文章のかたちで再現する。そして、そこから個人のことばの形成や、人とことばの関係について考察していきたいと思う。

2. セツさんの紹介

薛楽(セツ・ラク)さん(以下、セツさん)は、中国の浙江省(せつこうしょう)出身の中国人である。おばあさんのもとで育った一人っ子の彼女は、幼稚園に通っていた頃、江蘇省(こうそしょう)に引越し、小学校3年生のとき、再び地元の浙江省に戻った。そんなセツさんは、高校時代、とあるきっかけで日本語と出会い、その後大学では日本語を専門に勉強した。2年半ほど中国で大学生活をし、長崎での半年間の交換留学を経て、彼女はそのまま長崎の大学に編入、当の大学を卒業した。現在は京都大学大学院で音声学に関する研究をする傍ら、京都の日本語学校で非常勤講師として中国人日本語学習者に日本語を教えたりもしている。

3. セツさんの「ことばの旅」

3-1. 中国語の方言と標準語:はじめての「ことば」

おばあさんのもとで育ったセツさんが生まれて初めて出会ったことばは、地元である浙江省の方言である。周りの人がみんな方言を話していたため、自然とそれが身についていったという。これは彼女の両親が共に浙江省出身であることも関係していると思われる。セツさんが子どもだったときから彼女の両親は、彼女が中国の標準語で話しかけても、方言で返していた。それは今でも変わらず、彼女のほうは標準語を話すことが多くても、両親は彼女に方言で話しかけるといふ。それに対し、セツさん自身は子どもながらもあまり違和感を抱いたことはなく、大人になった今では両親が方言を教えるため、あえてそうしていたのだと感じており、それに感謝しているようだ。地元の方言は独特で、セツさんはそれを「ダサイ」などと思ったことはなく、「方言は好きですか?」という質問には迷いなくそうであると即答していた。むしろ、標準語をしゃべり過ぎて方言がしゃべれない人に対しては悲しいと思うという。ただ、はじめて出会ったことばである浙江省の方言の習得に関しては、あまりにも小さかった時のことで、はっきりとは覚えてお

らず、今ではそれほど方言を話すこともないため、「セツさんにとっての母語は浙江省の方言ですか？」という質問に対しても、「母語とは考えておらず、ただ愛着があるだけ」だと話した。

一方、幼少期の一部を過ごした江蘇省の方言に関しては、「聞いたらわかるくらい」で、話すことはできず、「愛着はない」という。中国の標準語については、幼稚園の時に、先生が標準語を話していたことや、ピンインを覚えようとしていたことなどの記憶はあるが、「出会い」自体に関する鮮明な記憶はあまりないようである。ただ子どもながらも「方言も標準語もどっちもしゃべれる感覚」があったと語っていた。今でも、浙江省の方言と同じように、中国語の標準語も好きだという。

3-2. 英語との出会い

セツさんがはじめて出会った外国語は英語である。彼女は小学校1年生のとき、当時通っていた江蘇省の小学校ではじめて英語に出会った。その後小学校3年生になったセツさんは再び地元の浙江省に引っ越すこととなる。中国は地域によって学校での英語教育が始まる時期が異なり、浙江省では小学校3年生の時から英語教育が始まるため、セツさんは転校後、改めて英語学習を最初の段階から再開することとなった。

それから日本語に出会うまでは、頑張って英語の勉強に励んでいた。「今でも、親が子どもに英語を熱心に学習させることは当たり前となっているが、当時もそれはほぼ同じであった」とセツさんは話した。学校におけるネイティブスピーカーの英語教師の存在も今では普通となったが、セツさんが学生だった頃はそうではなく、彼女は家でカセットテープを聴くなどの方法で英語に触れ、語感をつかもうとしていた。ことばを習得するのは早いほうで、彼女は学校以外の教育機関で英語を習ったことはなく、ほとんど独学で英語を勉強していたという。

その後大学に入り、日本語を専門に勉強することとなるにつれ、セツさんは英語の授業をだんだん受けなくなった。そもそも特定の言語自体を嫌いになることはないが、英語自体は最初からそれほど好きではなく、英語よりは日本語のほうが好きだという。そのため、学習暦だけを取ってみれば英語はおよそ12年、日本語はおよそ6年であり、ほぼ倍近くの差があるが、今のセツさんにとっては日本語の方が身近な言語であるようだ。特に、研究はもちろん、生活も主に日本語で行っている今では、そういった感覚はより強くなっている。例えば、英語の文献を読むときや、自分が今話した内容をもし英語で話すとしたら、と想像するときには日本語の身近さを感じるという。もし、英語で制作された映画を見るときも、英語の音声より、日本語の字幕を読んで内容を理解することになるだろうとも語っていた。

3-3. 日本語との出会い

セツさんが日本語に出会ったのは、彼女が高校2年生の時であった。友達への誕生日祝いに、世界の色々な言語で「お誕生日おめでとう」とのメッセージを録音してみて、日本語の発音が「かわいい」と感じたのである。なぜ、そのようなことをしてみたのかというと、世界のあらゆることばで「I love you」を言ってみるという内容の短い動画などが当時、流行っていたからである。もともと漢字や漢字語を美しいと思い、それらが好きである彼女にとっては、日本語が中国語と同じく、漢字や漢字語を用いるということも、大きな魅力であったようだ。そこから日本語にひきつけられた彼女は、ひらがなやカタカナを覚えたり、J-popの歌詞を覚えたりしながら、一人で日本語を習い始めた。当時のセツさんの日本語は、漢字が含まれていない簡単な単語や文章を読める程度のものであり、日本語の響きに慣れ、より早く話せるようにと思って、歌の歌詞を覚えていたという。

そして2012年、大学進学をきっかけに、セツさんは本格的に日本語を学習することになった。

最初はあまり難しいと思うことがなかった日本語学習だったが、だんだん難しくなったり、そこからまた「あ、そういうことか」と思えるようになってきたりしたそうだ。「日本語を勉強するにおいてもっとも苦労したのは何だったか？」という質問に対しては、「動詞の接続」と答えた。この文型に入るのが「辞書形」なのか、「ます形」なのかを覚えるのが大変で、交換留学に行く前である大学2年生のときは、一時期すごく悩み、「ずっとできなくて一番乗り越えることが難しかった」と語った。

3-4. 日本語での旅

3-4-1. 日本語を「学ぶ」

およそ2年半の中国での学部生活を経て、大学3年生の時、セツさんは長崎の大学で交換留学することになる。その後彼女はそのまま長崎の大学に編入し、卒業した。

長崎では国際コミュニケーション学部日本語学科に所属していた。セツさんは、当時はあまり「日本語の授業を取っていなかった」と話した。というのも、彼女は「日本語を授業で学ぶのは好きじゃなくて、活用的なものを」学びたいと思ったため、「日本語に関する授業」、「留学生がたくさんいる授業」よりは「普通の日本人と一緒にいる授業」を主に取っていたというのである。中国の大学でも日本語での授業を受けていたため、彼女にとってそれはあまり大変なことではなかったそうだ。また、当時は日本人の親友がいて、彼と会話をしながら、言いたいことを日本語でなんていうのか聞いたりしていたという。

また、長崎で生活していた頃は、ときどき「よか」など方言を話したりもしていた。気づかないうちに語彙以外の言語的特徴が移ってきたのか、京都で留学するようになってからも、指導教員の先生に「長崎の人のしゃべり方をしてるよね」と何回も言われたという。長崎の人のしゃべり方とはどのようなものなのかに関して心当たりはあまりないようだが、長崎の方言も、関西弁も同じくらい好きだそうだ。

長崎の大学を卒業し、およそ半年間中国に帰国していたセツさんは、2017年の9月から京都での生活を始めた。きっかけは、長崎の大学でとった「日本語音声学」という授業であった。その授業を通し音声学に出会った彼女は、現在は京都大学大学院で、関西出身の日本人中国語学習者の中国語の発音について研究をしている。自分が音声学に興味を持つようになった理由についてセツさんは、「日本人っぽくしゃべりたいから」なのではないかと話した。日本語のイントネーションを聞くと、その人が外国人であるかどうかはすぐに分かるため、イントネーションなどが気になるというのである。

一方で、彼女が方言について語る時も「イントネーション」ということばはよく登場していた。たとえば、京都に来て触れるようになった関西弁について語る時も、関西弁は「かわいい」と感じると言い、それはいわゆる標準語の日本語とはイントネーションが違い、変化が多いため、自分はイントネーションの変化が多い言語が好きだと語っていた。また、江蘇省の方言について話す時も、中国の標準語とあまり変わらないけど、トーンやイントネーションが変わると説明していた。おそらく、セツさんはイントネーションなど、ことばの「音」に敏感なのではないかと考えられる。

そして、それは彼女の流暢な日本語を形成するにおいて、重要な役割を果たしていたとも思われる。たとえば、セツさんが長崎で留学していた時、両親が彼女に会うため日本に来た時のことであるが、当時彼女はある日本人のおじいさんに道を尋ねた。道を教えてくれたおじいさんは、彼女が日本人ではなく、中国人であることに驚き、それが信じられずしばらく彼女を追いかけてきたというのである。そしてこのことは、セツさんの中にもかなり印象深い記憶として残っているらしく、彼女はこういう経験に対して「結構嬉しい」と話していた。

今では自分の日本語が「ある段階に止まった感じ」だと語り、「なかなか伸びない」と話した。また、今のところ、自信があるのは、日本語で「話す」ことだが、細かい文法はそこまで気にしないため、最も難しいと感じるのは、強いて言うならば「書く」ことだという。「今は前よりはマシ」だとのことではあるが、「～と述べている」、「指摘されている」など、アカデミックな文章特有の表現が難しく、「最初はすごく調べて」いた。今でも、レポートなどを書くときはできるだけ、ネイティブチェックをしてもらうようにしている。「聞く」、「読む」など、インプットに関する活動については、インターネットを使ってバラエティー番組などテレビを見ることはあるが、研究や授業のために論文などを読む以外、本を読むことはめったにないという。

3-4-2. 日本語を「教える」

そんなセツさんは、現在、京都の日本語学校などで、中国人日本語学習者に日本語を教えたりもしている。きっかけは、長崎での大学生生活を終え、中国に帰っていた半年の間、日本語を使う機会がほとんどなくなったということであった。このままでは日本語を忘れてしまうかもしれないと思った彼女は、外国語のオンライン授業を行う「涇江 (hujiang)」という企業を通し、日本語の教師として働くようになった。日本に在住している今でも、インターネットを通して、授業を行っている。授業は生放送といったようなかたちで、教師と生徒が同時に接続した上で、1対1で行われる。教材として使うパワーポイントのファイルやスケジュールはすべて本社から提供されるが、彼女は生徒に合わせて調整をしたりもする。

一方で、京都の日本語学校では主に日本語能力試験 (JLPT) N1 レベルの生徒たちを担当している。授業の内容は主に N1 の過去問を解き、それを解説することである。オンライン講義と同じく、受講者はみんな中国人であるため、授業は中国語で行っている。これは、本当に N1 に合格するための「対策」が必要な人たちへのものであり、そのため、「ドライ」であると、セツさんは話した。

日本語を「教える」においては、学習ストラテジーや単語の覚え方など、自分の日本語学習経験も「すごく活かしている」という。一つ例を挙げてもらったのは、紙を半分に折って、片方には日本語の単語を、もう片方には中国語でそれら単語の意味を書き、日本語の単語を見ながら中国語の意味を、また中国語の意味を見ながら日本語の単語を頭の中で照らし合わせ、ある程度それがうまくいったら、頭の中にとどまらず、実際に単語を書いてみるという方法であった。彼女自身、このような方法を使って単語を覚えていたという。また、「テキストを丸ごと覚えることもよくやっていた」そうだ。ただ単に単語を覚えるだけではなく、その単語が含まれている例文を自分のことばとして書けるようになることで「語感」をつかむことが大事であるということである。おそらく、セツさんはこのような方法を生徒たちにも伝授しているのだろう。

3-4-3. セツさんにとっての「日本語」

そんなセツさんにとって日本語はどのように位置づけられているのだろうか。例えば、一日の終わりに、その日を振り返るとしたら、彼女はどのような言語を用いるのだろうか。このような問いに対し、セツさんは「中国語」と答えていた。趣味である手帳飾りにおいても書き込みは主に中国語でしており、悩みを話したり書いたりするのも中国語が多い。「気持ちを表しやすいから」である。

しかし、とっさに出てくることば、たとえば、どこかにぶつかった場合まず出てくることばは、「あ、痛！」など、日本語であるという。また、「相談をするなど、内密な話をする場合においては、どの言語で話すのが一番気楽だと思われるのか？」という質問に対しては、相手の言語によって中国語でも日本語でも話すことができるのではないかと答えていた。つまり、深い話をす

る場合でも、ことばによって相手を選んだりほしくないということである。

もはや彼女にとって、日本語は「今では勉強のための言語ではなくなってきた」そうだ。「ほぼ母語みたいに使っているというか、頑張っている」と、セツさんは笑ってみせた。「もし、自分から日本語をとったら悲しいし、長い間日本語をしゃべらないと親友がなくなるようで、日本語との親しさがなくなるようでさみしい。日本語を活かしていきたい。」と語る。

そんなセツさんだが、ちょっと変わった理由で日本語を話すこともある。たとえば、デパートなどで自分が中国人であることを知ったら、店員の態度が変わることがあるため、そういうところでは、あまり「中国人であることを出さない」で、なるべく日本語で話すというのである。コンビニやドラッグストアなどでもそういったことはしばしば起こることなのであったが、自分が中国人であることで相手の態度が変わることについては「差別された気持ちになる」と述べていた。

将来は、日本で仕事をしてみたいとも思っている。具体的に言うと、日本で中国語を教えたいとのことであつた。中国語教師の免許は持っているが、中国で取ったものであるため、日本でも認めてもらえるかどうかはわからないという。ただ、これからどうなるかに関する長期的な展望はないようで、これからどう変わっていくかもわからないと語るセツさんは、そのような自分のことを「今を生きる人」と表現していた。

「日本語ができて良かった、日本語をやっている良かったと思った瞬間」について質問したところ、「留学ができること」という答えが返ってきた。最初は怖かったけど、だんだん慣れてきて、「別の世界の一部になれて良かった」と思えるようになったということである。むしろ、「日本はみんな静かだけど、中国はわいわいするから」中国に帰ると「逆カルチャーショック」があるという。

「一部である、違和感なく受け入れてもらえてる気がしている」というその答えについて詳しい話を聞かせてもらったところ、日本文化や社会などといった大きなもの的一部分になった感覚ではなく、そういうことまでは考えていないとセツさんは話した。ただ、自分の日本語で、うまく日本人とのコミュニケーションができた場合に、「親しくなった」と感じるとのことである。しかし、最近では日本人の友達が欲しいと思っており、お互いの言語を学びあい、交流できればいいなど考えている。特に、自分が生活の中で使うことはないとしても、日本人しかわからないようなことばを覚えてもらうためにも、日本人の友達がいればいいのにと語っていた。

4. セツさんとことば

私自身、セツさんと同じく、日本で生活している外国人日本語学習者である。ただし、私の場合、ささやかではあるが、日本とのゆかりがあることを子供のころから漠然と認識していて、小学生のとき日本で生活するという経験を通して直接日本語の世界に触れ、そこから日本語学習を始めた。

一方でセツさんは、「音がかわいいと感じたから」という理由で日本語を学びはじめ、今では日本語を自分のもう一つの「母語」のようにとらえ、生活も研究も主に日本語でしている。つまり、日本語を学ぶことを選びやすい環境が最初からそろっていた私とは異なり、セツさんの場合は自らの「発見」と「選択」から日本語学習を始めたといえるだろう。おそらくそれは、彼女の持続的な日本語学習や、日本での留学を決断する際にも大きく影響していたのではないかと考えられる。

また、似たような立場にいる者として、「日本語話者」として日本で生活することに対するセツさんの語りには大いに共感することができた。もはや自分のもう一つの母語として、確かな「自分の言語」として日本語を持っていると思いつつも、「日本人」または「日本語母語話者」で

はないことから「差別」のようなものを感じ、落ち込むことがある。それでも、日本語は自分から切り離したくない自分の一部であり、日本語を通して、「別世界の一部になった」と実感することも確かにある。単なる「学習者」から、ある言語の「話者」として、その言語が話される社会で生きるということは、もしかしたら、常にこのような葛藤の中で生きることなのではないかと感じた。

5. 人とことば

セツさんの語りからもわかるように、それぞれの言語に触れた順序や学習歴のそのものは、個人の中での各言語がどれくらい定着しているのかと必ずしも一致しない。たとえば、ある人の第1言語、第2言語などを聞いていく場合、基準を習得の順序にするのか、それぞれの言語能力にするのかによって、答えは異なってくるであろう。またそれは、愛着の大きさについても同じであり、自分が学んできた外国語を学問や就職の手段や道具としてとらえる場合もあれば、アイデンティティの一部として受け入れる場合もある。それには単なる学習歴以外にも個人の言語観などがかかわっていると考えられる。

また、韓国の場合、中学の段階から第2外国語教育が行われ、日本語または中国語の中からどちらかを選んで学習することが一般的である。ただし、学校によって設けている言語が異なっているなど、自分が学びたい言語を実際に学習できるとは限らず、生徒の選択の自由は限られているともいえよう。このような状況が実際の外国語学習のモチベーションなどに及ぼす影響なども存在するのではないだろうか。

6. おわりに

私たちは普段、生まれながらに何らかの言語を持っていると思いがちである。しかし、セツさんのインタビューで行った、自分が持っている言語をそれぞれとの出会いの時点から綿密に振り返る作業を通して、言語を学ぶということは「ことば」という、外部世界に存在するもの、自分の外側に存在するものを自分の中に取り入れ、自分なりのことばを形成し、ついにはその言語が成す世界の一部になることではないかと考えた。外国語学習についていうと、このようなことはより顕著で、わかりやすいが、実はそれは、母語習得においても同様であるように思われる。

このように考え方からすると、外国語学習は別の世界の一部になることを試みることにもつながる。しかし、別の世界の一部になったと本人が感じるとしても、それは母語の世界の一部になったとの実感とは異なり、ときに頼りなく、揺るぎやすいものであるように思われる。その頼りなさはどこから由来するのか。また、習得した言語を持ち、新たな世界へ踏み出そうとする者を承認し、受け入れる者は誰か。これらの問いについて、自分の経験や感覚などをもとに、これからも考えていきたいと思う。

言語との長い「付き合い」から

人間・環境学研究科 共生人間学専攻

言語科学講座 比較言語論分野

壇辻研究室 M1 薛楽

1. はじめに

第二言語（だいにげんご）とはその人が母語（第一言語）を習得した後に、あらためて学習し使用することができるようになった母語（第一言語）以外の言語である。一般的な第二言語学習者は、学校から正式な授業に入ってから勉強しはじめたが、本稿のインタビュー相手——韓国出身のキム・ダソムさんは、家族関係で幼い頃から外国生活をはじめ、外国語と長く付き合った。本稿は、インタビューを通じて、相手のことばの旅（主に第二言語としての日本語）について紹介し、そこから出たエピソードを収集した上で、個人的な言語学習経験から、一般第二言語学習者との相違点を掘り出し、さらに言語教育に結び付けていく手掛かりを探ることも期待している。

2. キム・ダソムさんの紹介

キム・ダソムさんは韓国のソウル出身であるが、幼い頃、お父さんのお仕事で初めての日本生活から今までは、日本と三回出会った。小学校4年生の頃、弟と日本の小学校で特別クラスも受けた。大学時代、同志社大学で1年間短期交換留学の経験があり、その後日本に留学したいという気持ちが強くなった。韓国外国語大学を卒業した後、京都大学に入り、大学院生として外国語教育に専念している。

3. ことばとの旅

キムさんの母語は韓国語で、お父さんが結婚された後日本の滋賀県へ留学に行かれ、その後日本でお仕事をされていた。キムさんは生まれた直後日本へ連れられ、初めての日本生活を始めたが、家では両親との交流は韓国語でやり取りをした。これから三年間、キムさんはずっと日本で住み続き、日本語との縁も結び付けられた。英語は第3が外国語として小学校2年生から塾で習い、3年生から学校で正規授業として勉強し始めた。

キムさんの韓国語と日本語の旅については、インタビューの中で少し触れた。幼い頃から日本で生活を始まり、韓国へ戻った時、ことばの障害はあるかどうかと聞いたが、まだ子供なので、日本語の影響はそれほど大きくなかったと答えた。むしろ、その後の日本語学習では、韓国語はメリットを与えていると言った。なぜなら、韓国語の発音、助詞、また授受動詞などの日本語と似たような表現があり、母語は韓国語ではない学習者より習得しやいからである。英語については、キムさんは「やらないとしない」共通なアカデミック的手段として勉強し続け、彼女にとっては日本語より英語は大きな学習負担をかかられている。筆者

はキムさんとの話を進めば進むほど、彼女のいままで触れた三言語との旅から、日本語へ傾けた「情熱」がほかの二言語より著しく示していることを感じられるため、本節では、キムさんの日本語との長い旅に焦点を絞り、面白いエピソードを再現することにより、キムさんの独特な日本語学習歴を読者と一緒にシェアしようとする。

3. 1 はじめての日本語

0歳から3歳までの3年間、キムさんはずっと日本で住み続き、日本語との縁も結び付けられてきた。時々、近所の遊び同士から「降りる」などの日本語でお母さんをびっくりしたこともあった。家に五十音図を壁に貼いてあり、「あ、い、う、え、お」と指し読みもしてきた。このようなことにより、キムさんと日本語の長い物語の扉を開いた。

3. 2 再びの日本語

3年後、韓国に戻ったキムさんは、小学校4年生の時（2002年10月頃）、再び家族と日本の滋賀県で生活することになった。最初は学校に行かず、遊びばかりの日々だった。このように続けていくとあまりよくないと思われたご両親は、キムさんと弟さんを学校に通わせた。外国人であるから義務教育の対象にならないが、ある先生の好意で特別クラスが設けられ、周囲の日本人子供たちと交流する機会ができた。先生の話は基本的に日本語ですが、たまに英語も混じり合った。植民地などの歴史的な話を散々読んできたので、日本人との付き合いを心配した彼女は向こうから振りまいた愛想で気持ちも少しリラックスした。それにしても、小学生になったキムさんは幼児期と違って、だんだん物心が付いてきたから、いきなり知らない世界へ連れられ、外へ出ても何も一人でできなくなった。幼児期に日本語との振り合いもほぼ記憶には残されていなかったため、交流が大変だった。そんな彼女にとっては、日本語が怖い存在で、常にお父さんが韓国から持ってきた韓国語の本で心の慰めを探し込んだ。

でも、ステップバイステップの勉強により、少しずつ子供たちとの交流が進んだ。言葉で話せないが、消しゴムを使っている動作をすると消しゴムが欲しいとか、手を組んで震えると寒いという意味を表しているとか、相手に分かってもらったエピソードもたくさんあった。また、勉強熱心の彼女はテレビで歌などを放送している「お母さんと一緒」という子供番組を見たり、物事の日本語の読み方を両親に尋ねたりした。当時は「楽しい」を「だのしい」と読んだりするように、発音はあやふやだが、喫茶店のメニューに書いてある「ミックスジュース」などの単語を指で一つ一つの仮名を指しながら読めるのも大きな楽しみだった。お店の人に「おすすめがありますか」と聞いた時に褒められたり、学校の先生に理由を聞かれた時にも「今日は約束があるので」と返事したりした。先生もご両親への振り返り手紙で「キムさんがすごい」と感動的な言葉を贈られた。最初来た時に日本語の問題で戸惑ったキムさんは、こういう場面がよく出てきたおかげで自信を持たせられ、日本語の怖いイメージもだんだん薄くなってきた。

3. 3 今の日本語

数か月後、また韓国に戻ったキムさんは、その時点から日本語との付き合いが前とすっかり変わり、ほぼ独学だったが、日本の漫画を読んだり、当時流行った日本語番組とテレビを見たり、高校になってから日本語の小説も読むようにした。単なる日本語だけではなく、日本文化も楽しんできた。日本語をやり続けたキムさんは大学の入学試験の外国語科目は日本語で受け、初心者とかなりのレベル差があったはずが、また日本語学科へ進んだ。それは彼女が日韓両言語とも好きで、翻訳者になりたいからである。韓国外国語大学を志望した理由もそちらにある通訳翻訳大学院を目指しているに違いない。大学に入った時点からの彼女は、日本語を第二言語として情熱を注いでちゃんとした学習者の立場から勉強してきた。

初めはそうだったが、同志社大学で1年間短期交換留学のきっかけで学習動機が変わり始めた。同志社大学では、日本語日本文化教育センターに留学生を1から9の言語レベルに分けられ、レベル別で日本語授業を設けるようなプログラムがあった。彼女はこういう外国語教育システムは韓国にはない、韓国にもこのような仕組みを紹介したいと強く感じられ、日本語教育の研究者への憧れが湧いてきた。その後、大阪大学に無事に入学した同級生の前例の励みで、京都大学へ進学することができた。

4. キムさんと日本語

いまのキムさんは、日本語と最も接触していて、日本語は日本で生活用語として用いられていることは当然で、研究対象としても熱心にやり続けている。本節では、第三節で出したエピソードを振り返りながら、キムさんの日本語学習へもう一步踏み込み、彼女なりの日本語への思いに注目しつつ、彼女の心に孕んでいる日本語を読者の前に現出させようとする。

4. 1 日本語との「親密感」

上述したように、キムさんの個人履歴と日本語の縁が深くて切り離れないことである。その長い「付き合い」から、日本語との「親密感」も生み出した。この「親密感」は一体どのようにキムさんの日本語学習生活に現れているか。

まずはこの「親密感」のおかげで、日本生活を楽しんできたことである。小学校4年生、再び日本で住むことになった時、まだ10歳の子供だったが、異国で生活するに怖がらず、「その日も来るだろうなあ」「赤ちゃんの時も住んだので大丈夫」と思いながら、むしろ日本と韓国の異なる生活に好奇心を持ち、自分なりの考え方で日本を理解してきた。また、交換留学を決めた時も、「一人でも全然いける」と最初から自信満々だった。短期交換留学後、日本の生活にまだ未練があるため、京都大学の大学院へ進学することにした。

なお、この「親密感」も日本語がうまくできることと強く結びつけられている。キムさんは小学校四年生から韓国へ帰ったとき、日本語で単語、短文を友達に読みあげ、「すごい」

などと褒められることがある。帰ってきた彼女は普段はインタビューの記事を読んで真ね
して言うてみるとか、わからない言葉の言いまわす方法を探すとか、これでだんだん上達し
てきて、結構喋れるようになった。今でも、研究室でほかの留学生にやさしい日本語で難し
い日本語を説明したり、間違った日本語を直したらすることが多い。例えば、「研究発表会
とは何か」といわれた時、「研究発表会はうちの研究室の人が集まって、……」と解釈し、
「借りてもいい？」と「貸してもいい？」混乱しているときもちゃんと言い直して区別して
あげるなどのことがある。そういうわけで、彼女は、日本語を生かして、将来日本語教育研
究者になれるのが一番望ましいことである。

4. 2 日本語との「距離感」

日本語との「親密感」がある一方、日本語との「距離感」も常に感じたと筆者に伝えた。
最初から触れてきた日本語はずっと関西弁であったキムさんは、関西弁＝日本語とずっと
認識してきた。「おおきに」「あかん」などを当然の日本語として使ったキムさんは、ある日、
関東で生活している韓国人が書いたブログでこのようなことばは関西弁であることが初め
て気づいた。短期留学のバイト先で韓国人の同僚に「あ、キムさんのことばは関西弁っぽい
と指摘され、自分が喋っている日本語は実は方言だとも意識した。それに、バイト先のおば
さんたちの分からない言い方も時々耳に入り、関西人の喋り方だなあとも思った。また、交
換留学後、韓国の学校へ戻った時も、先生に「訛りがあるよね」「関西弁に移ったね」とつ
いつい言われた。今の研究室にも、関東出身の人は関西弁が使わないから、自分が使ってい
る日本語と違うことにも感じた。しかし、関西弁に気づいた後、「関西弁がだっさい」「きれい
じゃない」とキムさんは一回も思ったことはない、むしろ関西弁でツッコミ、また関西弁
で、友達の話返す時、標準語では現れない面白さが溢れ、逆に関西弁をもっと触れたいと
いう気持ちが生まれた。そこで自分の関西弁のレベルがまだ足りない、関西弁とまだ距離が
あるとも感じた。

方言には独特な表現があり、外国人であるため、分からないと「距離感」を感じることは
当然だが、標準語が相当なレベルに達したキムさんに、一体どれくらい親しく言うのがいい
なのかと常に戸惑っている。研究室の面白い先輩と仲良しであると思ってため口で言い返
すと、相手に「キムさんはため口だね」言われたことがあり、コーヒー屋さんのスタッフさ
んがため口で声をかけたとき、見ず知らずの人だから敬語で返すと「丁寧な方ですね」に
言われたエピソードもあった。また、普段友達と接触するときも、話がだまかに韓国その国の
話について廻ったが、単なる韓国の話よりは、キムさん自身について「キムさんは何がすき
ですか」などと「個人的な話を聞かれない」。要するに、「友達ではない」感がすごかった彼
女はもっと空気を読めるようになりたい、普段の関係づくりをうまくさせたい、その仲間
の一部に認められ、周りの人々と親しくなりたい。それに、時々日本語の言い間違いも指摘さ
れ、言いたいことがなかなか噛み合わない場合も少なくない。

5. 考察

5. 1 自分との比較

今回私たちのインタビューペアはほかのグループと違い、母語話者を含めず日本語はお互いにとって外国語であることが最大の特徴として取り上げられる。おかげで、言語学習における様々な困難、および喜びなども共感できる。

まず、私とキムさんは同じく短期留学経験があり、そこで日本文化、日本生活にあこがれが溢れ、再び日本で正規正として留学することにした。ただ、短期留学の間、日本語はまだ未熟である私たちには、日本人に日本語が分からないと扱われる例が少なくない。例えば、キムさんは清水寺でバイトをした時ある日本人に「ライスありますか。ライス、ライスって分かる？」と馬鹿にしているような顔で言われたが、分かっているよ、ご飯っていてもわかっているよと物凄く伝えたいが、その場では言いたくない。私も餃子屋さんでお客さんが非常にゆっくり喋ってあげる気持ちにありがたいが、普通な話スピードで言ってもわからずがないような悔しさもあった。ただし、外国人であることがばれない時もあり、その時は日本語のレベルが認められたと結構嬉しい

また、日本語を勉強すればするほど、なかなか上達できない、日本人の親友ができないという悩みもお互いに共感した。確かに、「一体どこまで喋れば親しくなる」「日本人と親友になれない」と常を感じられる。言葉遣いの問題が考えられるが、一方、日常交流としての接触は少なくない。私はバイトしていたおかげで、コンビニなどで結構日本人と交流できたが、いまはバイトしていないため、日本人と親しくなれる機会がない。キムさんの研究室にも留学生が大人数で、日本人の方もあまりいない。偶々授業で日本人のクラスメートと出会っても、必要に応じたの交流にとどまり、友達としての交流にはなれない。

5. 2 話し言葉からの「言語習得」

個人的な話から目をそらし、言語教育の立場から見るとキムさんの経験は話し言葉からの言語習得の典型的な事例である。私のような多くの第二言語学習者は、学校特に大学に入ってから日本語を勉強するのは一般的だが、キムさんは子供の頃から既にオーラル日本語と接触し始めた。母語の受け入れもまだ未熟な段階でありながら、異なる言語環境で他言語に魅了され、言語学習のステーションに立ち入り、その言語への愛着は普通の学習者より長く続けられるとも思われる。それに、キムさんの話によると、日本語の学習は全体的にリラックスな状態で上達し続けてきた過程である。それに対し、日本語と同じ方法で英語もできないかと聞かれたが、英語は話し言葉からの馴染みがないため、書き言葉の場合、例えばアカデミックな論文を読む時は日本語より相当な時間がかかる。さらに、「やらないといけない」「母語話者とすらすら会話ができませんと悔しい」などの学習負担があり、なかなか日本語と同じように英語への愛着が孕まれない。

その話し言葉からの「愛着」はキムさんと中国の出会いからも検証できる。高校生の冬休み中国への団体旅行で店員さんから習った「北京烤鸭（ペキンダック）」や、交換留学の時

学校の寮にいた台湾人留学生からもらったお菓子「鳳梨酥」を食べて、話せるようになった。「我想去台湾（私は台湾へ行きたい）」と「我想吃鳳梨酥（私は鳳梨酥を食べたい）」や、いずれも周りとの接触で、ことばを知吸収した。こういう経験のおかげで、キムさんは「中国語を習いたい」との学習意欲も伝えた。

要するに、話し言葉は言語学習の入門段階に大きな働きを持っていることが考えられる。かえってみると、我々の母語の習得もほぼ話し言葉から入り、学校からの文法学習などの公式的な学習が先に立たず、周囲とのやり取りからその言語への馴染みが膨らまれ、学校に入っても国語として一からやり直しの勉強にも英語のような外国語学習と違い、それほど怖がらずやり続けている。こういうことも言語教育に応用してみると、外国語の入門クラスはオーラルクラスなどの用いることもあり得るのではないだろうか。

6. おわりに

本稿では、インタビュー相手の長い言語との「付き合い」から、一般学習者との異なる学習歴ならではの習得特徴を述べた。学習歴が長いため、レベルが高いと当然なことだと思われるが、今回のインタビュー相手は何十年以上の言語学習が続けられるのは、生まれながらの環境と関係があるが、その言語への「愛着」も見られるのではないだろうか。

参考文献

1) フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』, 第二言語, <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%AC%AC%E4%BA%8C%E8%A8%80%E8%AA%9E>

李宣さんのことばの旅—手段としての言語—

総合人間学部 3 回生

清水友登

【1】インタビュー相手・李さんの紹介

インタビュー相手の李宣さんは、中国の天津出身の 20 歳で、昨年の 9 月 25 日に来日したばかりである。現在は、京都大学の総合人間学部に交換留学生として在籍しており、日本語を専門としている。母語は中国語普通話であり、第二言語が英語、第三言語が日本語である。李さんは、16 歳の時に生まれ育った農村から隣町へ、その 2 年後に大学進学を機に北京へ、そして昨年日本へと、計 3 回の引っ越しを経験している。家族構成については、兄弟姉妹はおらず、一人っ子である。趣味は音楽、アイドル、中国漫才である。

【2】李さんのことばの旅

2.1. 中国語普通話との出会い

李さんの出身地である天津では、中国語の普通話が使用されているため、李さんは、0 歳から中国語普通話に触れている。したがって、中国語普通話が李さんの母語である。

なお、李さんの出身地である天津の方言「天津話」については、そもそも使用者が少ないため日常生活で使用することはなく、話すこともできないようだ。ただし、天津話は李さんの趣味の一つである中国漫才で用いられるため、聞いて理解することは出来るようである。

2.2. 英語との出会い・英語への思い

中国の天津では、小学校 1 年生から英語教育が開始されるため、李さんは 6 歳で英語と出会った。最初に学習したのは、“apple” などの基本的な単語や、“Nice to meet you.”，“Good morning.” といった簡単な会話表現だったようである。

英語に対する李さんのイメージは、「全体的にリズムが流暢」だそうである。また、英語を学習する上で一番困難に感じていることとしては、難しい単語を覚えることが挙げられるということであった。

2.3. 日本語との出会い・日本語への思い

李さんは、小学生の時に『名探偵コナン』や『ドラえもん』といった日本のアニメを通して、初めて日本語に触れたと語ってくれた。ゆえに、彼女が最初に学習した日本語は、『名探偵コナン』に頻繁に登場する「真実はいつも一つ!」というセリフだそうである。ただし、当時は基本的に中国語の字幕を通してアニメを鑑賞していたため、アニメを日本語学習の教材として用いていたわけではなく、純粋にアニメの内容を楽しんでいたということである。李さんが本格的に日本語を外国語として学習し始めたのは、大学に入学して、日本語を専攻するようになった 18 歳の時である。

李さんが持つ、日本語に対するイメージは、「かわいくて女性的」だそうである。中国語母語話者の李さんにとって、日本語の発音はかわいく感じられるようだ。また、彼女は日本語のリズム感も好きだと話

してくれた。なお、日本語をしっかりと勉強し始める前まで日本語に対して抱いていたイメージは、「常に『です』を使っている」というものだったようである。

加えて、李さんは、日本語を勉強するようになってから、日本に対するイメージの変化も感じたようである。具体的には、日本に関するニュースを耳にすると、以前よりも注意を向けるようになったり、日本に対して親しみを覚えるようになったりといった変化があったとのことであった。また、日本のアニメについて、従来は単純な娯楽であったが、現在では言語を勉強するツールとなってしまっているため、アニメを純粋に楽しむことが難しくなり、ややストレスを感じるものになってしまったとも述べていた。

また、現在李さんが日本語を学習する上で一番難しいと感じているのは、特に作文において適当な表現を選択することだそうである。

2.4. 韓国語との出会い・韓国語への思い

李さんは、韓国のアイドルグループ SEVENTEEN の影響で、19歳の時に韓国語に触れ始めたそうである。日本語の「です・ます」にあたる「スミダ」が、彼女が最初に覚えた韓国語である。ただ、韓国語に触れ始めたといっても、本格的に勉強しているわけではないようで、現状、いくつか単語を理解することができる程度で、韓国語の文法は全く分からないということであった。ただし、李さんは中国に帰国した後、大学の授業で新たな言語を学習しなければならず、そこでは韓国語を選択する予定であると述べてくれた。また、彼女にとっては、韓国語のアクセントがやや変だと感じられるようである。

【3】李さんとことば

李さんへのインタビューを通して印象的だったのは、

「言語は道具である」

という発言である。李さんにとって、言語はあくまでも何か目的を達成するための手段であり、そこに好悪の感情はないそうである。

そんな李さんにあえて言語に順位をつけてもらったところ、以下の通りになった。

1位：中国語普通話

2位：日本語

3位：英語

4位：韓国語

まず、中国語普通話は、李さんにとって母語であるため、日常生活に欠かすことができず、また、自分の意図することを最も正確に伝えることができる言語であるという理由で1位に選んだということであった。日本に留学している現在は、大学の授業や買い物、レストランでの食事など、日常生活のほとんどの場面で日本語を使うそうであるが、他の中国人留学生と会話するときには中国語普通話を使っており、やはりその時は安心感を覚えるということであった。

次に、日本語は、自身の現在の専攻であり、また、将来の仕事にも何かしら関係してくるということで、2位に選んだと語ってくれた。

そもそも、李さんが日本語を選択した理由は、大学進学のためである。李さんは高校生までまったく日本語を勉強しておらず、できることならば大学進学後は法学や経済学を専攻したいと考えていた。しかし、中国のトップ大学である北京大学に進学しようと考えたときに、成績の関係で選択肢として最後に

残ったのが日本語専攻であったため、大学で日本語を専門とするに至ったようである。つまり、希望する北京大学へ進学するための消極的手段として日本語が選ばれたのである。

また、李さんが日本へ留学に来た理由は、中国への帰国後に研究生（日本でいう修士課程の大学院生）になるために日本語の試験を受ける必要があり、そこで要求される文法や聴解の能力を高めるためであるそうだ。ゆえに、現状日本語を楽しんで学ぶことはできておらず、むしろ来年の試験で点数を取らなければならないというプレッシャーから、日本語を学習することがストレスになっていると感じることも多いようである。加えて、李さんは、将来は日本語を使って仕事をしてみたい、とも語ってくれた。具体的な仕事内容まではまだ決まっておらず、漠然としたものではあるが、現在学習している日本語を、生計を立てていく手段としていきたいという意気込みを感じることができた。

以上から、李さんにとって、日本語は学問的好奇心の対象ではなく、将来希望の進路を実現するための手段の一つとして存在しているという印象を受けた。

そんな李さんであるが、日本語についての新しい知識を得たり、自分の言いたいことが日本語できちんと通じるなど、日本人と円滑なコミュニケーションが取れたりしたときは、喜びを感じるそうである。また、日本語を通して積極的に日本の文化理解を深めたいとも考えているそうだ。

李さんにとっての言語の順位付けで、日本語に続いて3位に選ばれたのが英語、そして4位が韓国語である。英語は14年間勉強してはいるものの、現在の李さんの日常生活において重要性がさほどないため、3位となったということであった。同様に、韓国語は現状、自分が好きなアイドルグループに関係しているから少しかじっているという程度であり、日常生活においては何ら必要性がない言語であるため、4位となっていると語ってくれた。

【4】李さんとことばの関係についての考察

前節までからわかる通り、李さんは徹底して言語に対してドライな立場をとっており、あくまでも何か目的を達成するための一手段としてしか言語を見ていない。ゆえに、李さんの中では、その言語が自分にとって重要かどうか、役立つかどうか、すなわち、目的達成のための有用な手段となっているかどうか、言語間の相対的な順位を決定する大きな要因となっているのである。

言語、中でも日本語を専攻しているのは北京大学に入るための手段、現在留学してまで日本語を学習しているのは、日本語を使って仕事をするという希望の進路を実現するための手段、そして日本語をはじめとしてどの言語にも好悪感情がない、というように、ここまで徹底して言語に対してある意味フラットに向き合うことができる人はなかなかないのではないだろうか。李さんのこうした価値観は、私にとってはとても珍しく、面白いと感じられるものである。

【5】筆者の言語観との比較

前節までは、インタビュー相手である李さんの言語観について述べてきたが、本節では、私の言語観を紹介し、両者を比較してみたいと思う。

まず私は、「手段」として言語を意識したことがあまりない。私が今まで学習してきた外国語である英語と中国語を例にとって考えてみると、まず英語は、中学1年生のときから本格的に学習し始めた言語である。中学校、高校で英語の授業を担当していただいた先生が好きだったこともあり、文法の授業や会話の授業を楽しみながら受講していた記憶がある。純粋に英語という言語が好きであり、楽しいから英

語を勉強していたのである。一方、中国語については、使用されている文字が漢字であるところは日本語に似ているし、語順が主語・動詞・目的語の順番であるところは英語と似ているため、親近感を抱いた、というのが、大学に入って中国語を学習してみようと思った一番の動機である。

また、私は個人的に母語である北海道弁を一番大切に思っている。18歳で故郷を離れ、関西弁が行き交う京都で一人暮らしをしている私にとって、北海道弁は一種のアイデンティティーを保つよすがとなっているのである。

このように、李さんと私とでは、言語学習の動機や目的、更に母語が標準語であるのか方言であるのかという点も異なっている。そして、これらの違いが、私と李さんの言語観の違いを生み出す大きな要因となっているのではないかと推察される。

【6】おわりに一言語教育への展望

李さんへのインタビューや、そこから導き出された彼女の言語観についての考察を通して、言語の定義、また、言語を重みづけする際に重要視するものは人によって異なることがわかった。そこには、その人のバックグラウンドや、今までどのような言語にどのように触れてきたのかが大きく影響してくるように思われる。純粹にある言語を好んでその学習に没頭し、将来的にその言語を活かして仕事をしていこうとする人もいれば、逆に、将来の目標を定め、そのために必要な言語があれば、それに対して好悪感情を抱くことなく淡々と学習を進める人もいるのである。

この知見は言語教育へと応用することができるだろう。理想論に過ぎるかもしれないが、過度に一般化した画一的な教育を行うのではなく、生徒の多様性を認めたくえで、それぞれの事情を考慮して一人一人に合った最適なカリキュラムを策定し、柔軟な指導をしていくことが、言語教育において肝要であるように思われるのである。

誰もが持つ普遍的なものでありながら、一人一人がそれに対して異なった考えを持っている。そこに言語の面白さがあるのではないだろうか。

「好き」な言葉

1. はじめに

言語は情報交換のための欠くことができない手段である。人は言語を用い、他人と交流したり、出来事を記録したりする。この過程で、人類の文明は進んでいる。そして、日常生活と密接な関係があるため、人はある言語に対して、特別な感情を持っていることもある。このレポートでは、京都大学総合人間学部の三回生、清水友登さんの言葉との関係を記述する。それを踏まえて人と言葉の関係を考える。

2. インタビュー相手の紹介

清水友登（しみず ゆうと）さんは、北海道札幌市出身の一人子で、今は京都大学総合人間学部三回生である。生まれてからいつも都会に生活している。引っ越しの経験は大学進学した時に札幌市から京都市まで、一回だけである。夏休みには塾で国語と歴史の先生を務めていた。彼は比較的に慎重とマイペースである。旅行に興味を持っているため、海外旅行の経験も非常に多く、ハワイ・イギリス・フランス・シンガポール・ベトナム・台湾に行ったことがある。

3. 言葉との旅

3.1. 北海道弁・標準語

清水さんは北海道生まれなので、0歳から大学入学まで、両親と周りの人々はみんな北海道弁を使っていた。それで北海道弁と出会った。そして、6歳に小学校に入った後で、国語の授業で標準語に触れたけれども、先生たちは標準語も北海道弁も使い、友達とチャットした時には北海道弁を使ったので、彼にとって北海道弁は依然として一番重要な言語であった。だから、彼の世界は北海道弁を基づいて構成されたともいえる。

しかし、清水さんは北海道にいったときには、北海道弁を使い、「自分が使っているのは北海道弁だ」ということもわかったけど、大学に入学した前には何とも思っていなかった。そして、三年前に故郷を離れて京都に来た。それをきっかけに周りの人々は北海道弁を全然使わなくなり、みんな関西弁を使った。環境が変わったので、「ここの人じゃないよ」ということを意識すると、寂しい感じが生まれた。そのような環境の中で、清水さんは「北海道出身」ということを示したく、自分の故郷を忘れないようにしたくなったので、北海道弁がより好きになった。すなわち北海道弁が好きだというより、実は自分の故郷としての北海道が好きである。しかし、そうかと言って、清水さんは北海道出身ではない人に対して、意識的に北海道弁を使うことはあまりない。無意識に出ている可能性があるだけである。

私も清水さんと同じように、日本に来た前には中国語が私にとって非常に重要だということに全然気がつかなかった。だが、私は中国語を使うのが好き、もう一つの理由は私は日本語より中国語で言いたいことがもっと言えるのであ

る。しかし、清水さんはそうではない。日本語の方言と標準語との間に、違いはそんなに多くないからだという。標準語でも北海道弁でも、彼は自分の考えや気持ちを言い表すことができる。

大体同じけれども、方言には特有な単語や表現があるので、北海道弁がわかる人と交流するのは比較的簡単である。例えば、北海道弁には「しばれる」という単語があり、この意味は「寒い」だけど、ひらがなは「寒い」と全然違うので、北海道出身ではない人はわからない。関西の友達はそのような北海道弁を聞くと、わからないけど面白いと感じる。そのような細かい点も清水さんに「この人じゃない」ということに気にさせた。

方言について、もう一つ面白い点は、清水さんは LINE で友達とチャットするときには北海道弁のあるスタンプをよく使う。彼は「それは自分の出身を示したい」と説明した。それ以外に、「北海道弁のあるスタンプを見ると安心です」という理由もある。しかし、人と話すときに、彼は北海道出身の人がもっと好きなのではないが、先に述べたように、方言には特有な単語がわかる北海道出身の人と交流するのは簡単に通じるためである。「北海道出身の人と話し合うときには普通よりおしゃべりになることはありますか」という質問に対し、清水さんは自分の性格はチャットが好きなので、そんなことは特にないと答えてくれた。

3.2. 関西弁

清水さんは三年前に京都大学の入学をきっかけに、関西弁と出会った。周りには関西弁を使う人が多く、彼もおしゃべりなので、関西弁は次第にできるようになった。しかし、彼は「関西弁はちょっと怖い」、このような印象を持っている。なぜかという、関西弁のイントネーションは下がる所が多いからである。

関西弁ができるので、清水さんは講師を務める塾で、関西出身の学生たちと話すときには関西弁をよく使う。関西出身の友達をチャットするときにもつられて関西弁を話す。そして、北海道弁は家族と電話をするときに使う。関西弁も北海道弁も日本語の一部なので、彼は意図的に言葉を変える必要はなく、無意識に言語モデルが変更できる。

3.3. 英語

清水さんは幼稚園の時に、外国人教師から簡単な英語会話の文句を学んだ。(例えば:「Thank you.」「Nice to meet you.」)単語や文法など体系的に勉強するのではなかった。

中学校に進学すると(12歳)、英語を正式に勉強し始めた。彼は英語の先生が好きなので、英語の勉強も楽しんだ。そして、英語その言語も好きになった。学校には、教科書を基づく授業と会話能力を高める授業、両方ともあった。しかしながら、英語試験の内容は文法や単語など教科書の知識にしかなく、会話能力を測定する試験が特になかった。テストとは関係ないが、言語運用の一部

分としての会話も大切にしたのは、受験勉強を重視する中国で生まれ育った私を驚かせ、羨ましい感じも生まれた。

中学校二年生の時に、清水さんはハワイに旅行に行った。そこで英語を使うこともあった。英語を正式に勉強した経験は二年間だけだが、会話も聴解もできた。外国人と英語をしゃべった時にもあまり緊張しなかった。清水さんはそれはあの時に中学生なので、大学生となった今の自分より勇ましかったからだと言ってくれた。

3.4. 中国語

清水さんは小学校一年生（6歳）の時に、偶然にテレビでNHKが放送している外国語を教える番組を見つけた。その日のテーマは中国語であった。その番組は演劇の形式で中国語の単語と文句を教えた。番組を見ると、幼い清水さんは「面白いなあ」と思っていた。それをきっかけに中国語に興味を持つようになり、中国語に関する本も買ってきて時々目を通した程度になった。このレポートをよく完成させるために、清水さんはわざとその本を持ってきてくれた。漫画みたいかなあと思ったけど、実は単語や文法、そして会話練習もあり、面白い教科書であり、難易度は中国の小学生の国語授業のレベルである。それなのに、正式に勉強を始めなかった。そして、18歳に大学生となると、学校に「第二外国語を勉強しなければならない」と言われ、小学生時代に出会ったお馴染み深い中国語を選んだ。一回生と二回生の二年間に、週二回（会話の授業一回・文法の授業一回）の頻度で授業を受けていた。「会話と文法、どちらが好きですか」と聞かれ、清水さんは会話が楽しいので好き、文法の方は新しい知識を習得でき、「ああ、勉強した」と感じられると言った。彼は知らなかった知識を得ることが好きなので、文法の授業も好きである。

大学1回生の勉強が終わった後で、清水さんは台湾に旅行した。中学校二年生の時にもハワイに行った。外国語を勉強すると、その言語を使う国家に旅行するのは習慣ではないだろうかと思っただが、それは両親の提案だという。せっかく外国語を勉強したら、その国家に行く方がいいと考えるからである。両親が海外旅行が好き、清水さんもその影響で海外旅行に興味を持つようになった。

4. 発見

4.1. 清水さんと言葉・私との比較

清水さんにとって、一番大切な言葉は北海道弁である。それは自分の故郷が好きのためである。関西弁には「ちょっと怖い」という印象があるけれども、おしゃべりな清水さんは関西弁を使える。英語に関して、最初には授業を担当した先生が好き、英語を勉強しているうちに、英語の魅力も感じた。そして、中国語には番組のおかげで興味を持つようになったので、自主的に触れたことがあり、大学にお馴染み深い中国語を第二外国語として勉強した。

私は清水さんと、違うところがたくさんある。

まず、私は生まれてから、ずっと標準語を使っていて、方言は時々触れたこともあるけど、私にそんなに重要な影響を与えない。日本に来た後で、中国語の重要性がわかったが、その理由は清水さんは北海道弁が好きになった理由と違う。

次に、清水さんは英語その言語を純粹に好きである。それは彼が知識を習得することを好み、勉強を楽しめるためであると思う。しかしながら、私は言語に対して、あまり趣味がない。性格は冷静なので、言語のツールとしての機能と言語を使って達成できる目標をはっきりと分ける。おそらく、これは私の思い込みに過ぎないが、言語は文法や表現など、言語学の概念だと思う。外国語を勉強すると、別の社会や文化をさらに理解できるようになったり、友達を作ったりするときに、私もうれしいけど、単語を暗記するとき、二つの文法を区別するとき、まだ退屈だと感じる。この点は性格の違いではないか。

4.2. 人と言葉

4.2.1. 母語

言語、特に母語は、私たちにとってもう慣れたことである。すなわち日常生活を構成する一部分になったので、好きなものや好きではないもののような評価と感情はないが、周りの人たちと交流に対して一番重要な道具である。しかし、母語を離れるときにだけ、その重要性を感じられる。一方、方言を使う人にとって、標準語でも交流できたけど、方言の場合と比べると、違うことは非常に多い。一つは、方言の中には特別な単語や表現がある。それらは自分と出身が同じな人以外に誰でもすぐにわからない。もう一つは、方言は地域を最もよくあらわれることである。方言によると、ある人の出身地は判断できる。だから、故郷を離れた人にとって、方言を使うのは自分のアイデンティティを示すためのいい方法である。自分自身に対して、それも故郷を忘れないようなリマインダーである。

4.2.2. 言語教育

清水さんの中国語の勉強経験に対し、私の感想は、単に言語そのものを教える教授法は退屈であるが、演劇のような日々の生活シーンと組み合わせる言語教育は学生の関心を引きやすい。もしその日に、清水さんが見たのは授業のような番組であったら、彼はすぐにチャンネルを変えるだろう。ほかには、勉強は学生の自発性に頼るだけでなく、「しなければならない」のような外部からかかる力はときには必要である。

そして、外国語教育を行うときに、教師は学生の達成したい目的にふさわしい教授法を選択すべきである。私のような実用性を重視する学生は、試験の中によくある質問や、実際に外国人と交流し、海外で生活するときによく使われる表現に関心を持っている。しかしながら、清水さんのような、ある目的のた

めではなく、単純的に外国語勉強を楽しむ学生に、言語の魅力を伝えられる知識を教える方がいいと思う。

5. おわりに

このインタビューを通して、人はある言語が好きになった理由は違うということが気になった。母語は言語の一つだけではなく、人生最初の記憶の一部であり、故郷との関連でもある。そのような特別な感情を持っているので、「好き」というより、母語や故郷に愛着を持っているのである。そして、外国語に関して、好きかどうかは人々の特性によって違う。言語の文法や構成に関心を抱くため、言語を用いて国際交流を楽しみたいため、好きになった理由もたくさんある。言語教育を行うときに、そのような特性に注意しなければならない。

「当たり前」のことば

GEA 段洵美 (DUAN XUNMEI)

1、はじめに

言語は共同体成員間に成立した契約として捉えられている。その契約に通じて、互いに考え方や気持ちを理解し、より深い人間関係を結ぶようになる。空気と同じように日常生活に大きな影響を与え、不可欠な言葉はもう「当たり前」のことになった。毎日言葉を使っている我々は、「どうして言葉を勉強するか」ということを考えず、その存在の意味合いさえ意識しないがちである。本稿では、京都大学の学生、三津海童さんへのインタビューをもとに、三津さんの「言葉との旅」を再現する。そして、三津さんの重み付けや価値付けを自分の思いと比較し、「当たり前」かのような言葉の中にそんなに当然ではないことを考え、人と言葉の関係について考察していきたいと思う。

2、三津さんの紹介

三津海童さんは京都大学総合人間学部の4回生で、地理を専攻している。福岡出身なので、小さい頃から博多弁を話しているが、12歳より6年間鹿児島で寮生活を送った。高校時代から野球を始め、今でも野球と筋トレが好きである。

3、言葉との旅

3.1. 博多弁との出会い

福岡出身の三津さんをご両親を含む周りの人々の影響で、生まれた時から博多弁に触れている。三津さんが話している博多弁は昔のものよりも標準語に寄っているため、日本人同士は理解できる程度であるそうだ。

三津さんをはじめに出会った博多弁を自分にとって一番重要な言語だと話した。特に進学のために故郷を離れて鹿児島と京都に移ってから、博多弁を聞くと安心感を得られるようになり、それ以来このような帰属感と安らぎを与えてくれた方言をより大事にするようになったそうだ。「方言は地方の言葉だけど、田舎っぽいものだとは思わない」と話した三津さんは、博多弁を「自分のアイデンティティーの一つ」とであると認める。だが、今は日常では標準語メインであり、「福岡出身の親しい間柄」と話すときにだけ、意識することなく、自然に「博多弁モード」で博多弁を話しているそうだ。「普段使いの博多弁は小学校終わりまで」で、今は方言を話す機会が少ないので、普段博多弁を喋っている人を見ると「ちょっと羨ましい」という気がするという。とはいえ、友達に「博多弁を喋ってみてよ」と言われるとやはり恥ずかしくなるそうだ。それは、自分が愛慕している方言を他人に何か面白いことのごとく扱われることが嫌だからではないかと私は考える。

私は天津（北京と非常に近い都市）で生まれ育ち、北京大学に進学し、今まで中国語の

標準語しか話さない。両親は天津出身の人ではないため、周りの人の影響で天津話が話すようになったが、それは自分の「方言」だと思わない。三津さんの「方言は自分のアイデンティティーの一つだ」という考え方を心より認め、自分は「方言がない」人だと思い、さらには「根がない」人だと思ふ。そのため、方言を持っている人を見ると羨ましくなり、三津さんの方言への愛着も十分にわかる。

三津さんと同じように、私は異郷の日本で中国語を聞くとすぐに落ち着くようになる。しかしながら、中国語への愛着がますます増える一方、「中国語で喋りたい」ことなく、自分の日本語レベルをできるだけ上げるため、かえって中国語環境を徹底的に離れたと思う。

3.2. 標準語との出会い

博多弁がスタンダードの地域で生まれ育った三津さんは、「自分が喋っているのは方言だと意識しなかった」。また、(いつかのことであったかはよく覚えていないが、)母親に「私たちが話しているのは標準語じゃないのよ」と指摘され、自分にとって「当たり前」であった言葉が実は方言であったということを知った時の衝撃は、彼にとって印象的なエピソードであるようだ。しかしながら、三津さん自身は標準語も話すことができたため、「驚いたけど、『嫌だ』『恥ずかしいなあ』という気持ちは全然なかった」と話した。

鹿児島で、三津さんは六人部屋に住んでいた。その時、中学校一年生・二年生・三年生が同じ部屋で暮らしており、一、二年生のうちは三津さんも先輩に敬語を使わなければいけなかった。そのため、中学校から敬語を使うことが増える一方、博多弁を話す機会は相対的に減ったようだ。このように、三津さんは特に何か苦しい経験をすることもなく、ごく自然に日本語の標準語を身につけ、標準語と方言を使い分けるようになった。

3.3. 英語との出会い

三津さんは中学校で英語を学び始めた時を思い出し、当時「わざわざ勉強している感覚はなかった」と話した。特に洋画が好きだというわけではなかったが、英語を聞き取れることが嬉しいと感じるようになり、英語で映画を観ることが次第に好きになったようだ。しかし、学年が上がるにつれ、大学入試のためによりアカデミックな英語を勉強しなければならなくなり、単語や文法を覚えるばかりになった。このようなコミュニケーションを軽視した英語学習を好ましくないと思うようになり、勉強のための英語は多かれ少なかれ嫌いになった。

京都大学で受けた英語の授業と高校のものはどう違うかという質問に対して、三津さんは「高校までは言葉を覚えるけど、大学では英語の使い方が大事」と答えた。このような区別があるが、三津さんは今までどちらにしても「好きでもない嫌いでもない」と思っており、それについて特に理由がないようだ。

3.4. イタリア語・ロシア語・中国語・韓国語との出会い

なぜ大学時代に四つの言語を学んだかということについて、私は三津さんが特別に言語に興味を持っている人であるからではないかと思ったが、三津さん自身は「ただ単位が欲しかったからだ」と答えた。「自然に入ってきた」英語に対して、彼はこの四つの言語が「文法から始まった」と感じしており、全く好きにはなれず、授業が終わったらもう「何も残っていない」という。このような気持ちの差の根源は、勉強始めたタイミングの違いにあるようだ。「英語って言葉自体が好きじゃなくて、中学校のときもし英語じゃなくて、イタリア語を勉強し始めたら、イタリア語が好きになったんじゃないか」と、三津さんは話した。また、英語の影響を受けたため、「『アルファベット=英語』って感じがあって、英語以外の場合にアルファベットを使うと違和感があった」ようだ。イタリア語ばかりでなく、中国語を勉強した時も、漢字を見ると意味がわかるが、アルファベットで発音を表記するピンインは苦手という感覚があったようだ。

進学の関係で、三津さんは鹿児島弁と関西弁にも触れたが、自分にとって重要ではなく、普段も使わないため、本稿では述べないにする。このように、多数の言葉と出会い、普段標準語を話しているが、三津さんにとって博多弁ははるかに重要であることだと言える。

4、三津さんとことば

言語学習のことがあまり好きでは三津さんにこの授業を受けた理由は二つあるようだ。一つ目は教育への関心である。卒業後、高校の教員になることを希望している彼は、3週間の教育実習をしたこともあり、この授業を通じてさらに教育方法などの学びを深めたいようだ。また、日本人と外国人が日本語を習得する時のプロセスは完全に違うと思っている彼は、外国人の日本語学習のプロセスにも興味を持っている。

博多弁を話している三津さんが、鹿児島の中学校で苦しい経験をするこも、一生懸命新しい環境に馴染めるように努力する必要もなかったということは、私のイメージしていたものとは大きく異なっていた。彼が順調に「標準語モード」に変わったということ聞き、言葉の多様性を守っているため、教育する時も方言を許容するというこの影響を侮ってはいけないと思う。

他の人より多くの外国語を勉強したが、三津さんには自分には「語学のセンスがない」と思っており、言語学習が好きではないようだ。外国語教育について、彼は「イタリア語を勉強しようと思ったら、イタリアに行って、実際にイタリア語に触れる」という方法が一番良いと話した。三津さんに今まで経験した教育方法への考え方を聞くと、彼は「言葉を勉強するのは気持ちを伝えたいから。形はそんなに重要じゃないから、形を気にしすぎることはよくない」と思い、イントネーションやアクセントを母語話者と同じようにするこ

とは「できればいいけど、難しい」と考えている。私も教科書を通じての外国語学習だけでは不十分であり、教科書の言葉は「本当の言葉ではない」と感じたため、京都大学と北京大学のプログラムに参加する道を選択した。しかしながら、日本語を専攻している私にとって、発音も細かい文法も末節ではなく、言語を支えているかなり重要な要素として存在し、無視してはいけないものである。間違いないだけではなく、ネイティブスピーカーと同じように使えたり、日本社会を深く理解したりするために、これらは気にせざるをえないと思う。

また、外国語学習が好きではない三津さんは、日本語あるいは日本語教育に自分なりの考え方があつた。外国人の私に対して日本語を話すときに「未然形を使うか、連用形を使うか」ということはそんなに重要ではないと言つた彼は、「間違つた日本語を使つている日本人が嫌い」とも話した。例えば、「こんにちは」が「こんにちわ」になつたり、「言つたとおりに」がなんと「言つたとうりに」になつたりする間違いがあつた。彼はこれらも「ら抜き言葉」と同じように、数年後には間違いではなくなるかもしれず、日本語にとってはよくないと話した。

5、人とことば

このインタビューを通じ、三津さん自分も意識しなかつた言葉への思いや価値付けを発見した。また、私自身の経験と比較し、一人の人間と言葉の関係というより広く深いことを考えてみる。人々は言葉を「当たり前のこと」として身につけ、毎日自然にを使つているが、果たして本当にそうなるのか。

5.1. 言葉

博多弁は方言だと意識しなかつた小学校時の三津さんと、皆は自分と同じ言葉を使つていると思つていた私は、自分の母語が「当たり前」の言葉だと思ひ、それに何か特別な気持ちも持っていなかつた。我々人間は、自分の言葉が「当たり前」だと認められる地域や環境を離れないと、その言葉は当然ではないことを意識できず、大切さもなかなか感じられない。

5.2. 言語学習

「気持ちを伝える」ことや「単位を取る」ことのために言葉を勉強している三津さんに対し、私は将来の仕事によく役に立つため、今一生懸命日本語を勉強している。勉強の目的は甲乙なしに違ひない。ただし、それによつて方法が違つてくるため、言語学習は決して「当たり前」のことではないと思ひ。中学校一年生になつたら、当たり前英語を勉強することではなく、自分は何のために英語を勉強するかということをおろかじめ考へておけば、大勢に従わず、適当な方法を選択し、数倍の効果をj得ることもできると思ひ。

5.3. 言葉の変化

社会の発展とともに、言葉も変化している。しかし、私はこのような変化が本当に当たり前だとは思わない。現在、中国でも、ある言葉において誤用を正しいと思っている人が多いために伝わりやすいようにあえてそのまま誤用している作品が多く、また多くの人が発音を間違えたために辞書が変わったことも少なくない。言葉そのものは互いにうまくコミュニケーションを取れるように作られたものであることに違いないが、人々の使う習慣を尊重して誤用に干渉を行わず正しいものと認めるか、純粹性を守るために人々に正しい言葉しか話させないか、言語の未来を決定し得る我々はこの問題を改めて考えなければならないと思う。

5.4. 母語教育

中国では、標準語を普及するために幼稚園から高校までの授業は必ず標準語で行う上に、大学入試においてもまだ言葉の声調についての質問がある。その結果、方言が話せない若者の数が増えている一方、方言を話す人を見下すことも少なくない。大人の世界に限らず、方言を話すために同級生の中で孤立したり嘲笑われたりする学校でのいじめもよく報道されている。このままでは、標準語を主流として位置付けることばかりでなく、方言を禁止する傾向もあると考えられる。実は、標準語を話すことは決して「当たり前」なことではない。従って、いかなる場合でも皆に統一の標準語を話させるよりも、教育の場面においても方言を尊重し、一人一人の「アイデンティティー」を確立することこそが、言葉の発展や児童・青少年教育に重要だと思う。

6、おわりに

三津さんへのインタビューを通じて、彼にとって言語の重要性ばかりでなく、自分にとっての意味合いも改めて考えることができた。また、毎日使っているが、誰でも重みを置かず言語は、人間関係を強めながら、人とある地域の接着剤のような役割も果たしていることがわかる。しかし、言葉を勉強するときも言語教育を実施するときも、言葉の「当たり前ではない」ところに注意しなければならないと思う。言葉をどのように変化していかせるか、標準語普及政策のもとに方言をどのように位置付けるか、それらの問題も考えるべきではないかと思う。

言葉に対する印象とその変化

総合人間学部四回 三津海童

① はじめに

様々な学生が必ず一度は経験する言語学習。その際にその言葉を好きだと思うか、嫌いだと思うか、また義務教育が終わった後もその学習を続けたいと思うかどうかは人それぞれである。言葉に対する印象は学習の意欲に関わる重要な要素である。どのような授業、取り組みが学生の言葉に対する印象を良くすることができるのか。本稿では段洵美さんへのインタビューをもとに彼女が言語学習の際にどのような経験をしたのかを再現し、筆者との比較も交えつつ考察したいと考えている。

① 段さんの紹介

段洵美（だんしゅんび）さんは中国・天津出身の中国人。北京大学外国語学部日本語専攻の三回生で、今年の秋から一年間の留学で京都大学総合人間学部に来ている。趣味は読書、ドラマ鑑賞でインドア派。生まれ、育ちはともに天津であったが両親が天津話を読さなかったため初めて触れた中国語は標準語である。

言葉との出会い

	いつ	どんな言葉と	どこで	誰から
1	0歳	中国語（標準語）		両親
2	3歳	英語	幼稚園の授業	先生
3	6歳	中国語（天津話）		隣人
4	18歳	日本語	大学の授業	先生

② 言葉との旅

I. 段さんと中国語

彼女は自身にとって重要な言語は二つだと考えている。一つは中国語の標準語だ。この言葉は彼女の母語で産まれてから1日も欠かさずに使ってきた言葉であり、また日本に留学してきて中国語文化圏から離れて以来日本で中国語が耳に入るたびに感じる安心感から、以前にも増して自身の母語への愛着が増している、という。

母は中国語の標準語しか話すことができないが、逆に父は河南省出身で大学に入

るまでは方言しか話すことができなかった。そのために苦労したことがあったという。しかしこれは中国では少ない話ではない。

彼女は6歳の頃、天津話に触れた時に初めて、逆説的に自分の言葉が標準語であるという認識を得た。段さんのこの経験は、私の博多弁が方言であるということに気づいた瞬間の感覚にとっても似ていると思った。この二つの経験の差は、段さんが標準語を母語にしているのに対して私は方言を母語しているということである。それ以来、彼女は天津話話すことができるので、中国人の友人に「天津話で話してみてよ」と言われ話すことがあるが、そういった時に天津話特有の発音を笑われてしまうことを好ましく感じていない。中国では天津話は芸人が使うイメージの定着した言葉らしく、これは日本語の大阪弁に近いと言えるだろう。

また彼女は日本語を勉強し始めて以来、中国語は人を悪くというような表現が多いと感じるようになったらしい。例えば、中国では人の悪口を言う際に本人だけでなくその家族も悪く言う人が多いそうだ。ただ私はこの感覚は「隣の芝生は青い」ことが大きな理由なのではないかと思った。

II. 段さんと日本語

もう一つ、彼女にとって重要な言語は日本語である。彼女は現在大学で自身の専攻として日本語を学んでおりそれは、将来日本語能力を活かして中国で日本関係の仕事をしたと考えているためだ。彼女に具体的にどのような仕事に就こうと考えているのかを聞いてみると、少し悩んだ後に大学で日本語を教えるか出版社に勤めるなど、日本語をツールにするのではなく日本語自体を対象にしたいと答えてくれた。教師になりたい、という夢は小さい頃から漠然と持っていたという。

彼女は北京大学に入学する際に日本語専攻を選んだが、これは積極的な選択ではなかった。というのも彼女は大学入試の点数があまり芳しくなく、北京大学に入学するためには外国語学部の日本語専攻かスペイン語専攻のどちらかしか選ぶことができなかったのだ。その二択で彼女が日本語を選んだ理由は主に以下の二つであった。一つ目は父親の勧めである。日本はスペインに比べて経済が発達しており中国からの距離が近い将来役に立ちやすいだろう、という考えだった。二つ目は中国語と日本語がともに漢字を使用しているため、比較的日本語は学習しやすい言語である、ということだった。

ということで日本語を勉強し始めた彼女であったが、もともと受験勉強の際に英語学習が苦手だったことから「自分は語学学習に向いていない」と考えていたこと、日本語は日本でしか使用されない言語であることなどから勉強をし始めた時は、彼

女は日本語学習にあまり積極的ではなく、大学での点数もあまり良くなかった。しかし学習を開始して半年たったあたりから、日本語の授業が面白いこと、また日本語自体に面白さを感じるようになったことから日本語がよく身につくようになった。彼女は日本語の表現に面白さを感じたと言っている。一回生後期に学んだ「てあげる」「てくれる」「てもらう」という文法が中国語にはなく、相手へ感謝の気持ちを十分に伝えることができる点に良さを感じているという。

また「女の人が使う言葉」「お客さんに対してはこう話す」という日本語独特の使い分けは難しいが面白いとも語ってくれた。彼女は単に単語、文法を覚えることにとどまらず、「なぜこんな言葉を使うのか」「こう話す時の心情はどうか」「テキストの裏にある文化はどのようなものか」と考え始めたことが、日本語学習が身に付き始めた転機であったと語ってくれた。

その後大学で日本語を学ぶ中で彼女は教科書、授業だけではわからない日本の文化、本当の日本語を知りたいと感じ日本への留学を決めた。彼女は現在簡単な日本語なら頭の中で中国語を介すことなく日本語で返すことができるが、自分の日本語は留学前の期待を下回っていると感じている。

また留学に来たにもかかわらず日本語と触れ合う機会をあまり持たず、寮や大学などで中国語を話すことが多いためもっと日本語を使ったコミュニケーションをしたい、と焦っているそうである。

Ⅲ. 段さんと英語

彼女は当初、英語は自身にとって重要な言語ではない、と語っていた。なぜなら彼女にとって英語は単に義務教育の中で学ぶことを強制された言語だから、である。しかしその英語に関してインタビューを試みたところ、自分自身は重要性を感じていない言語ではありながら彼女の言語観には一定の影響を及ぼしていると感じ、インタビューののち彼女もまたそれを認めたため第三の言語として英語について記す。

彼女が本格的に英語に触れたのは小学校の授業である。その授業において生徒たちに最も求められた英語の能力は Reading でも Writing でも Listening でもなく Speaking であった。常に正しい発音を求められた段さんだったが、自分の発音に自信が持てない当時の段さんは英語の勉強自体を嫌がるようになってしまった。そして、これが最も彼女の言語観に影響を及ぼした出来事であるのだが、彼女の母親はそのような娘の態度を不真面目だ、と強く叱ったのである。その時の辛い感情は今後英語の勉強を続ける際に常に彼女の心に陰を落とし続けている。中学校に入学し、

本格的な英語の勉強を初めて以降も彼女にとって英語の勉強は辛いものだった（彼女の名誉のために述べると、決して成績は悪かったわけではなくむしろ上位に名を連ねていた）。

彼女は留学に来る前は全く想像もしなかったのだが、留学に来て以来彼女は英語の必要性を強く感じたのだという。9月に行われたオリエンテーションでは留学生同士のコミュニケーションは常に英語で行われるし、先生と会話する際も日本語では伝わらなくとも英語ならば伝わる、といった英語の世界共通語としての機能を実感したからである。そのため現在日本語と同様に英語の勉強も必要だと感じているがしかし、実際には何も勉強してはいない、と困ったような笑みを浮かべながら彼女は語ってくれた。

③ まとめ・考察

彼女は英語、日本語ともに最初は良い印象を持っていなかった。しかし現在は両言語に対しての感情は異なっている。なぜそのような違いが生まれたのだろうか、と彼女に尋ねると悩んだ末に「英語は文法から、日本語は文化から」学び始めたからだと答えてくれた。彼女に英語の授業に対して良い印象を持っていないが、日本語の授業の内容は楽しそうに語ってくれる。いくつか彼女が実際に受けた授業を紹介する。

・川柳を詠む授業…ちなみに段さんの詠んだ川柳は「古池でインスタ映えした旅カエル」らしい。なかなかの自信作だと胸を張っていた。

・ディスカッションをする授業…「無人島に何を持っていくか」「不老不死は良いことかどうか」などのテーマについて日本語で討論したそう。

・漫画を読む授業…「ドラえもん」「名探偵コナン」などを読んだらしい。

段さんが語ってくれたように文化をテーマにした自由な授業が多いように感じた。そのような授業方式の方が、学生が言語に興味を持ちやすいのは自明であると言えるだろう。また私は中学校時代から学び始めた英語に対して比較的いい印象を持っていたのだが、その理由について考えるとネイティブの先生が行う授業で毎月様々な洋楽を歌う機会があり、文化に触れながら英語を単元ではない親しみやすいものとして接することができたからだと感じた。

彼女は語学学習において重要なことは文法やスペルなどマイクロな部分に気を取られすぎないことだと語ってくれた。現在若者が語学学習をする機会といえば高校、大学での授業によるものだろう。そうした勉強は基本的に能動的なものにはなりづらく、テストで高い点を取ることが目標になってしまうためにマイクロな部分に気を

払う学習になってしまい、ひいてはかつての彼女のように語学学習に苦手意識を持つことに繋がってしまうのであろう。恥ずかしながら私もまた語学学習に対して苦手意識を持っている人間であるが、彼女と私の違いは語学学習への苦手意識を克服できたかどうかである。彼女は日本語の話をする際多くの場合において、日本語の授業がいかに楽しかったかを話してくれる。彼女自身が語ってくれたように語学学習を単に暗記科目とするのではなく、その言葉がどのように語られているのか、どのような背景があるのか、という実感のあるものにしていくことが語学学習の苦手意識克服のために重要なのではないかと考えた。

④ 終わりに

私は自分自身が、語学学習が苦手なことの理由を単に自身の暗記力の弱さだと考えていたが、段さんとのインタビューを通じてモチベーションの重要性を感じた。単に言葉をツールと捉えるのではなく人と人との関係の中で育まれて来た文化だと実感できるかどうか重要なのだと感じた。

⑤ 追記

これまでの私の語学学習は点数を取るための暗記でしかなく、言葉は意味のない文字列の羅列でしかなかった。先日、友人と台湾に行った際に多くの中国語と接する機会があった。私は一応大学で中国語を学んでいたので若干の知識を持っており、わずかながら駅のアナウンスなどの部分的な意味を理解することができた。その時私は自分の中で、中国語が単なる記号から生きた言葉に変化するのを感じた。こうした自分のわからないものがわかるようになる感覚が語学を学ぶ人のモチベーションの一つなのだろうか、と感じた。しかし一方で私はその経験を持ってしてもやはり外国語を勉強してみたいと言う気持ちにはならなかったので私の外国語嫌いはかなりのものなのかもしれない。

また最終発表会の後、段さんの中で日本語に対する感情の変化があったそうだ。それまで彼女にとって敬語は「使えないと恥ずかしい」もので、それを使用すること、勉強することに自発的な感情は薄かった。しかしこの授業で様々な留学生からアドバイスや意見をもらい彼女の中で「先輩」としての尊敬の意が生まれたと言う。そしてその感情を日本語で適切に伝えるために敬語を正しく使えるようになりたい、と彼女は考えるようになったと話してくれた。

1. はじめに

日本語教育は、規範的な日本語を効率的に教える教育分野と捉えられがちである。しかし一人ひとりの人間の言語活動の実態、言語への関わり方を見ていくと、規範性や効率性を一義的に定めることの難しさを実感できる。

今学期の「日本語教育論2」は、「日本語」コンセプトの来歴・問題について講義したのち、相互インタビュープロジェクトを通じ、人間の言語活動の多様性・複雑性について理解することをしたのである。授業で採用された方法は、国の異なる2人のグループを作り、お互いにインタビューをすることである。

本稿では、主にインタビュー相手の日本人のパートナーのことを報告する。具体的には彼はこれまでどのような生活を過ごし、どのようにことばを使い、そのことをどのように捉えてきたのかについての内容である。そのためまず、インタビュー相手の紹介をする。それから、生まれてから現在までの言語の経歴について説明する。その後、考察と、このインタビュープロジェクトによって、ことばと人の関係がもつ多様性・複雑性から考えたことを述べる。

2. インタビュー相手の紹介

今回のインタビュー相手は、同じ京都大学の日本人学生であり、総合人間学部の2回生の青木純也君である。

2.1 家庭環境

青木君の出身地は兵庫県宝塚市出身である。お母さんは同じ兵庫県出身であり、お父さんは千葉出身である。お母さんは標準語寄りの関西弁を話し、お父さんは関東弁を話すため、その環境に恵まれ、青木君は関西弁も標準日本語も話せるのである。

青木君は、三人兄弟の三男であり、両親も合わせると五人家族である。そして、神戸弁を話すおじいちゃんおばあちゃんがよく家に来る。青木君は幼い頃からおじいちゃんとの交流が多く、おじいちゃんのことを好きであるため、小さい時から神戸弁に親近感を持って使うようになってきたのである。

2.2 性格や将来の夢

性格について、青木君は少し内向きだと思われる。自分で考えることが好きだそうであり、話すことより、青木君は聞く側だと考えている。青木君と話してみると、理系男子の雰囲気を感じられるのであり、頭が冷静で物事に関する意見を述べるときに根拠もちゃんと出し、ロジック思考ができて知識豊富ということが観察されたのである。

将来の話について、青木君は心理学が好きであるという理由で、将来できればそれに関係ある仕事を従事したいと話した。そのため、現在は公認心理士資格を取るために勉強しているのである。なぜなら、趣味でもあるし、総合人間学部は、公認心理士資格の必要単位を取りやすいこともある。

3. ことばとの旅

3.1 生まれた時の神戸弁：誇りに思っている言語

先ほど「2.1 出身」にも書いたが、生まれた環境の影響で、幼い頃から、青木君は関西弁（神戸弁）と標準日本語を話すことができる。

まず神戸弁について、青木君が小さい時に、おじいちゃんがよく家に来たことがある。週四五回くらいできて、おじいちゃんと楽しいお話をしたり一緒に遊んだりして、青木君はおじいちゃんのことを好きである。おじいちゃんは神戸弁しか喋れないため、その影響を受けて神戸弁に親近感を持って使うようになってきた。

外国人にとって神戸弁と関西弁はあまり区別しないと考えているが、日本人にとってどう思うのかについて、青木君と兄弟の例が挙げられる。青木君が小さい時に、家族の三人兄弟は一緒に遊んでみんな関西弁で喋るのである。そのうち、一番上のお兄ちゃんは、大阪の高校で勉強したので大阪弁を話し、青木君も大阪の高校だったが関西弁より神戸弁の方は影響が深かったのである。しかし、関西弁であれ、神戸弁であれ、一緒に話す時にはあまり違和感を感じなく、自然に交流できて使っている言語を気にしないと青木君は言ったのである。

また、関西弁と神戸弁の区別について、青木君の話によると、兵庫県の西からきた人は神戸弁、兵庫県の東の人は関西弁を話す、言語自身はそんなに変わらないと言われた。神戸弁には「～しとう」というのは関西弁との最も大きな違いである。

3.2 母語としての日本語：繊細で面白い

また、日本語について少しまとめて述べる。

青木君は日本人であるため、もちろん方言の神戸弁は喋れるが、全体的にみれば母語は日本語である。日本語に対してどのような感情を持っているのかについて青木君に聞いた時に、日本人の日本語への考え方が見えてきたのである。

日本語について、言語自体に音節の数は少なく、構造的にも単純で、だいたい一子音プラス一母音からなるので、音の強弱によってアクセントが変わるものではないと思われた。なので、日本語は英語やフランス語のようなものではなく、音の高低によるアクセントのため、青木君から見れば、日本語ははっきりして力を出してる言語ではないと考えられる。また、日本語は中国語とは違って、音節のなかには音の昇降がないので、響きがあって綺麗だとはあまり思わなかったのである。

しかし、音やアクセントは異なるが、日本語はまた別の面白い点があると考えている。

外国人として日本語を学んだ時に、一番難しいと思ったのは日本語のオノマトペだと個人的に思う。私から見れば、日本人は日常生活の中によくオノマトペを使って、時々日本人と話す時に、語彙がわからなく相手に聞いたら、それを使って説明してくれたこともある。オノマトペを知らない私に、そう説明してくれるとさらにわからなくなるが、日本人にとって逆にオノマトペが伝わりやすいと思われると考えている。このような経験があったため、日本語はとても曖昧で繊細な言語だと思い、語彙も豊富であり、時々日本人しか理解できない微妙で綺麗なものもあると考えている。これについてまた青木君に聞いた。

日本語のオノマトペに関して、青木君はすぐ色々な例を出してくれた。例えば、ブツブツとかボソボソとかモゴモゴとか、それを聞いて頭の中に、ただ「ABAB型」のカタカナの羅列だけだと思い、意味は全くわからなかったのである。具体的に「ズルズル」の例で、「課題やろうと思ったけど、ズルズルと引き延ばしちゃった」と挙げられ、なるほど課題を引き延ばす時には「ズルズル」を使うのかに驚いた。中国人の私の考え方で、もし同じことを言いたい場合、多分「課題やろうと思ったけど、つい引き延ばしちゃった！」を話すので、オノマトペ絶対使わない（中国語にないかもしれない）。この点について話

したら、青木君は、外国人は日本語を学ぶ時の困難さも理解してくれて、自分が普段無意識的に使っている日本語を考え直したのである。

「日本語の特徴」についての話になり、青木君はまた色についても多分違うと思い出した。なぜかという、日本語で色を説明する時に、ただの黄色とか緑とかだけではなく、例えば浅葱色や、萌黄色や、山吹色なども使うこともあるからである。最初にこの三つの単語を聞いてよく分からず、漢字で書いたら意味はなんとなくわかるようになった。中国語にも時々似ているような言葉があるが、文学作品の中に多く普段は使わないと考えている。

これらの例から見れば、日本語は非常に繊細で面白い言語だと考え、この点について二人は同感である。

3.3 中学一回生からの英語：日本語の次に最も聞き取れる言語

中学一回生、12歳の時に、青木君は英語を勉強し始めたのである。学校で英語の先生から、色々英語についての知識が教えられた。

英語は青木君にとって、今まで勉強してきた時間が一番長い外国語である。そのため、学校では、聞き取りとかほとんどのことは全部やったのである。

3.4 大学一回生の時のフランス語：街でよく見かける言語

青木君のお母さんは、大学時代にフランス語文学専攻であったので、フランス語は上手である。そのほかに、彼女は家でもよくフランス文学のことなどについて話した。その影響を受け、大学一年に入ったら、青木君はフランス語を学ぶのを決めたのである。

今まで、フランス語は1年間をやったのである。具体的な内容として、文法と聞き取りと作文と訳をやった。フランス語を勉強すればするほど、青木君はフランス語は英語と日本語と似ていることがあることを気づいたのである。フランス語は英語とラテン語根の語彙が被っており、また語順は日本語に似ているので、そこは良かったと思われ、学びやすいと青木君が考えている。しかし、フランス語の動詞の活用が多すぎるので、難しさも感じられている。

3.5 大学二回生の時からの中国語：響きがきれいな言語

青木君のお父さんは、お仕事の関係で中国語が堪能である。話によると、青木君のお父さんはよく中国に行き、北京や上海など数十回も行ったのである。そして、中国のことも色々青木君に教えた。それをきっかけに、大学二回生の時に、青木君は中国語を第三外国語として勉強し始めたのである。今まで、中国語を勉強するのはただ2ヶ月目であるが、文法と聞き取りと発音と作文と訳をやっている。

中国語に対してどう思うのかについて、青木君は、中国語は漢文とかの知識があるので、意味はわかりやすいと考えている。また、中国語は英語と同じ語順であるため、その点も理解しやすくないと思われる。しかし、同じ字を日本語の読み方で覚えてしまっているので、字の発音が覚えにくいと話したのである。

3.5 まとめ

以上の内容からわかるように、青木君は母語の関西弁（神戸弁）と標準日本語だけでなく、英語、フランス語、中国語、母語以外に3つの外国語を話すことができる。もちろんそれぞれの学習歴によって、言語のレベルは異なるが、いわゆる「複数言語話者」とも言えるだろう。以下は、それぞれの言語に対して青木君はどのように思っているについて考察し、また個人的な経験と考え方と比較してその差異を述べる。

4. 言葉と人の考え方

4.1 日本語（標準語&方言）について

日本語（標準語&方言）について、青木君は神戸弁に誇りに思っている。なぜかという
と、神戸弁は生まれてから使った言語であり、親近感があり好きであるため、どこに行っ
てもそれを話すつもりだと話されたのである。神戸弁の具体例として、友達からの話があ
る。青木君の高校は大阪にあったため、周り大阪弁をしゃべる子は多かった。そして、一
人の友達は、「たこ焼きレインボー」というアイドルグループが好きである。たこ焼きレ
インボーのメンバーの1人は神戸弁をしゃべるので、その子のことが好きな青木君の友達
は、青木君の言葉を肯定的に捉えてくれたという話があった。

逆に、方言ではなく、標準語に関してどう思うのかについて、青木君は時々冷たいと感
じたり、距離感を感じたりすることがあると話したのである。彼の話により、関東弁と関
西弁は聞こえ方が少し違い、例えば関西に人気の「ジャルジャル」というお笑いコンビ
の、あるコントのことも話した。（Youtube:『関東出身のツッコミ下手な奴』）

青木君と比べてみれば、私は標準中国語しか話せなく、方言が話せない方である。その
ため、青木君は方言も標準語も喋ることに、羨ましいと感じたのである。

なぜなら、二人の生まれてからの環境は違うと考えるからである。私は中国の北部（山
西省太原市）に生まれ、方言として「太原弁」はあるが、両親も周りの友達も方言を話さ
なく、ずっと標準中国語「普通話」を話している。そのため、高校卒業するまでは、「人
間は標準語を喋るのは当たり前だ」と思い込んだのである。

しかし、大学から中国の南部（四川省成都市）にいき、そこのクラスメートはみんなそ
れぞれ自分の方言を持っていることにびっくりした。方言は地域の特色があり自分のアイ
デンティティにも影響し、友達の方言に触れてから、方言のない自分に時々かわいそうに
思った。その後、家に帰って両親に「なんて私たちは方言を話さないの？」と聞いたら、
両親はそれが標準語ではなく、「劣っている」と考えていたので、自分も話したくなく
て、私にも教えてたくなかったのである。その原因は「普通話普及政策」につながってい
るかもしれないが、同じ「普通話普及政策」の影響を受けた中国の南部では、方言への誇
りはあり、今でも日常生活に方言を使うことが多いと感じたのである。

さらに、日本語を勉強した後、日本の色々な方言にも触れつつ、方言のない自分の中
に、「これから頑張って方言学ぼう」という気持ちがだんだん強くなっていく。現在は
時々、日本人の友達に関西弁を覚えてもらうのである。個人的な考えでは、関西弁はとて
も面白い言語であり、イントネーションは今まで勉強してきた標準日本語より豊富で可愛
いと考えている。

4.2 外国語（英語&フランス語&中国語）について

母語以外の外国語について、それぞれどう思うのかを青木君に聞いたのである。

青木君は中学校一年生から英語を学び、大学一回生からフランス語を勉強し、二回生の
時に中国語を勉強し始めた。それぞれを勉強する理由は、学校の要求と、家庭内両親の影
響が大きいと考えている。また、英語もフランス語も中国語も、いわゆる「大言語」であ
るため、世界的に影響力の強いことで勉強しようとする気持ちも想像できるのである。

今まで学んできた言語の中に、「思い出のある言語」について聞いたところ、特にな
いと話したのである。なぜなら、言語をツールとして捉えるからである。英語と中国語とフ
ランス語を話せば、わりと世界中の人と話せると思われ、汎用性が高いと考えられる。
そのため、英語とフランス語と中国語以外に、他に勉強したい言語はあまりないようであ
る。一方、話者人口の多さとか気にしなければ、タガログ語とかを気になるのも話したの
である。

もちろん、言語の学習は、単純に発音や語彙や文法など、言語的なものを勉強するだけではなく、その新しい言語に属する文化や社会を理解することなどにもつながると考えている。言語学習の時に何か発見とかあるのかについて青木君に聞いたところ、新しい言語を勉強し、その言語に属する文化圏などにもさらに興味が沸きたと話したのである。英語はもちろん中国語を話す人も世界の至るところにいるし、フランス語もカナダやアフリカなどでも話されているので、その話者層の多様さが日本語にはないところだという発見もあったと言ったのである。また、中国語を勉強することで、中国の社会状況などについても興味を惹かれ、言語以外の文化や社会のことについても色々話したのである。確かに日本と中国の政治経済や社会状況は異なるが、その違いをわかった上コミュニケーションをすることで、前より社会への相互理解を深めることもできたと考えている。

以上、それぞれ程度の差はあるが、青木君は複数の言語を身につけ、それを習得することで、単純に言語の知識ではなく、複数の文化も理解し、言語も文化も異なる他者を尊重できるようになる複言語力を身につけたと感じたのである。

青木君と似ているように、最初に外国語を学んだ時に私も言語をツールとして捉えたと考えたため、日本語学科ではなく、より広く汎用性のある英語学科に入りたかったのである。しかし、学校の事情で日本語学科に強制的に編入されてしまい、その結果、日本語を勉強し始めた1年くらいは、日本語にも日本社会にも全然興味はなかったのである。私はアニメにもドラマにもあまり興味がないため、その時、「なんてこんな私は日本語学科にいるんだろう」と思いつつ、大学を卒業したらすぐ日本語をやめて、日本語と関係のない仕事を探したいと考えていたのである。

その後、2回生の時のある先生の面白い教え方のおかげで、とりあえず専攻として、日本語を頑張って勉強しようと思ひ、さらに3回生の時に、交換留学の機会があるため、「せっかくの機会だから、一応体験してみよう！ どうせ卒業した後に日本語もやめるし、こんな良いチャンスはない」と適当に考え、日本に1年間留学することにしたのである。

当時の私は絶対想像できないが、今から見れば、そのことは私の日本語への態度の転機になったのである。実際に日本社会にきて、たくさんの人々と出会い、いいこともよくないことも色々体験し、面白い授業や部活に参加することで、日本語にも日本社会にも興味を増やし、より努力して学びたくなり、日本語教師になるまでも考えたのである。そして、日本人の友達と交流することで、教科書にある「日本」と、実際的に感じた「日本」のギャップも発見し、頭の中にあつた偏見やステレオタイプなども一部消え、日本文化と社会へ一層理解したのである。その時から、日本語はただのツールではなく、言葉にはツールを超えて、もっと強い力があることを実感したのである。

私にとって、英語ではなく、日本語を学んで、日本に留学することは、ただ日本社会への理解を深めることだけではないと考えている。もう一つの外国語を勉強することで、より視野広げることもできたのである。日本も多く外国人がいるため、日本人や欧米人と交流しながら、この世界の美しさと広さや、多種多様の人々とそれぞれ考え方の違いなども自ら深く感じたのである。もちろん最初はビックリして、衝突とかも理解できない点もあったが、無意識的のうちに、交換留学時代の守屋三千代先生から教えてくれた「みんな違ってみんないい」という詩を、思い出したのである。時々考え方や文化の違う人と出会ったり、文化ショックを受けたりする時に、

「すずと、小鳥と、それからわたし、みんなちがって、みんないい」、

文化と、考え方と、それから社会、この世界の人たち、みんなちがって、みんないいと、寛容な態度で違いを理解することもできたのである。

5. 終わりに

ことばと人の関係は、単純に言語面から影響するのではなく、多様性・複雑性も持っている。今回のインタビューを通じて、パートナーの日本人のことを理解するだけでなく、自分の今までの言語使用歴を振り返ることもでき、色々考えさせたのである。

言語はコミュニケーションのツールである一方、その中に文化的要素も含まれている。そのため、言語での交流は、ただ言語の道具としての役割を果たしているだけでなく、相手の文化にも触れ、理解を促進する手段でもあると考えている。それは母語であれ、方言であれ、外国語であれ、変わらないものだと感じたのである。

今まで学んできた複数の言語は、言語面で言語間の転移など、新しい言語を学びやすくすると同時に、学んだ複数の言語により異なる話し相手や異なる文化や国に対して、感情面で人々の考え方にも影響し、より寛容な態度にもつながるだろう。

ことばに対する思いの重要性

1. はじめに・張心悦さんについて

このレポートでは、張心悦さんと言う中国からの留学生とのインタビュー内容と、それを通して分かったこと等を記す。そして、その個性を生かすために、敢えて言語や言語教育についての一般的な導入などは省く。

見る人の心や目を楽しませてくれるという意の”赏心悦目”から名付けられたという心悦さんは、その名の通りとても楽しそうに可愛らしい話し方をするが、話す内容は多様な民族の文化や言語や教育について洞察に富んでいたりしたので、とても興味深かった。その他の彼女の情報については、時系列になっている以下の文章から読み取っていただきたい。

2. きれいな”普通话”・誕生から小学校低学年まで

山西省の省都である太原市で生まれた張心悦さんは、祖父母や地域の人が太原弁を話す環境で育ったが、両親から標準語で話すように言われていたので、そしてそのことについて何の疑問も持たなかったのも、その通りにしていた。太原市は北京から500kmほど南西に行ったところにあるので、そこまでことばに違いは無いそうだが、両親はできるだけ標準語を話させようとしていたらしい。それは張さんの生まれ育った家族に限らず、中国全域で標準語化政策が行われていたからだと推測できる。

小学校に入ると、1年生から拼音（ピンイン）を学習し、日本の小学校で漢字にふりがながふってあるように、簡体字と拼音をセットで覚えて、正しい発音を学んでいった。生まれた時から小学校に入るまで表意文字である簡体字だけに囲まれて過ごすのは、ひらがなも使用している日本人の自分にはどのような感じなのか少し興味がある。

3. 思い出の童話作品と、優秀な中高時代・小学校高学年から高校まで

小学5,6年の時に父から主に海外の童話作品をたくさん買ってもらい、それらの童話作品に拼音が付いていたので、それを読むことで発音を学んでいたらしい。シンデレラのもとになった灰かぶり姫（灰姑娘）などが有名なグリム童話を読んだりしたことなどがよく記憶に残っているようだ。小学校では、先生から『論語』『大学』『中庸』『孟子』の四書を読んで暗誦する課題が出されたそうで、それも拼音がふってあり、だいたい読めるようになっていったという。

中学に上がると、急に拼音がなくなったが前述のように簡体字だけでほとんど読めるようになっていたので、たまにわからない単語を辞書で調べる程度で事足りていたそうだ。

高校は優秀な高校に進学したので、山西省内の他の市から来た生徒たちも同じクラスになり交流したという。その生徒たちはそれぞれの方言を持っていて、同じ地域出身の生徒たちで集まると方言で話していたそうだが、先生など誰かに言われたわけでもなく、1ヶ月ほど経つと自然に標準語になっていったらしい。そうして高校の3年間はほぼずっと標準語を話しており、それが当たり前だと思っていたという。

4. 南下して感じた言語の多様性・高校卒業から大学入学まで

高校までずっと地元を離れなかったなので、その環境に飽きてしまい、全く知らないところに行ってみたいと思ったので、山西省からかなり南にある四川省の大学に進学することにした。その時ちょうど両親に時間があつたので、車で1,2週間ほどかけて旅行しながら四川省まで行ったそうだ。その時に大きく言語について衝撃を受けたという。黄河を渡るまでは標準語に近くて何も感じなかったのが、黄河の南に行くと同じ言葉とは思えないほど響きが変わったそうで、しかもたくさんの種類の方があることにはかなり驚いたらしい。例えば道中で買い物をした時などに、その土地の方言で話しかけられて答えられずにいると、今度は標準語で話しかけられたという経験から、標準語の他に自分の

方言を話せることに羨ましさや憧れを感じたという。

そして大学にたどり着いてからは、みんなほとんどが四川語を話す環境になり、初めは少し怖かったそうだ。というのも、四川語はわりと早口で荒々しく感じるからだという。また高齢者などで標準語を話せない人には、標準語も話せる人に通訳してもらわないと伝わらなかったらしい。

5. 日本語への微妙な思い・大学1年から、大学3年前期まで

大学では日本語を専攻したそうだが、実は日本語は第3希望であつたらしく、抽選で第1希望の英語と第2希望の経営管理が外れてしまったので、日本語になったという。そして、1年生の時に教授から、「試験を受け直せば、専攻を変えることができるよ。」と言われたので、専攻を英語にすることを真剣に考えていたらしい。そのような気持ちも胸に秘めていたので、半年ほどは、授業には出るもののやる気が湧かず、宿題もほとんどやらなかったという。

しかし1年の後期になり、ある女性の教授がとても気に入り、その教授の授業は楽しくて、少しやる気が出るようになったそうだ。その授業では、「エリンが挑戦! にほんごできます。」("艾琳的挑战! 我会说日语。") [<https://www.erin.ne.jp/zh/>] というアニメやゲームを使いながら学べるWEB上の教材が用いられたらしく、そういった工夫も彼女を飽きさせないことに一役買ったのだと思われる。その甲斐もあってか、専攻を変える最終締切である2年の初めに、教授から専攻を変えるか聞かれたが、日本語のままにすることに決めたという。

2年からは、ほどほどに頑張っただけ勉強するよう(本人曰く、「宿題ぐらひは頑張っただけ完成させるって感じ。」)になったが、日本語そのものにそこまで興味はなく、ただ専門として勉強するに留まっていたそうだ。

そんな彼女に転機が訪れたのが、3年に入りJASSOが主催する留学プログラムに応募したときである。早稲田大学に1年間交換留学をするプログラムであったのだが、2,3人しか枠が無いにも関わらず、彼女しか申し込んだ人はいなかったという。少し話が逸れるが、中国では早稲田大学が大変有名で、留学するなら東大か早大の2択だそうだ。

学校名		留学生数	
早稲田大学	私立	5,072人	(4,767人)
東京福祉大学	私立	3,733人	(3,000人)
東京大学	国立	3,618人	(3,260人)
日本経済大学	私立	2,983人	(2,708人)
立命館アジア太平洋大学	私立	2,804人	(2,818人)
筑波大学	国立	2,426人	(2,326人)
大阪大学	国立	2,273人	(2,184人)
九州大学	国立	2,201人	(2,089人)
立命館大学	私立	2,141人	(1,860人)
京都大学	国立	2,134人	(2,009人)
東北大学	国立	2,025人	(1,941人)
北海道大学	国立	1,851人	(1,735人)
名古屋大学	国立	1,805人	(1,672人)
慶應義塾大学	私立	1,677人	(1,518人)
明治大学	私立	1,456人	(1,294人)

出典：JASSO「留学生に関する調査」

調べてみると、早稲田大学は最も留学生を受け入れており、京都大学の2倍以上も受け入れていることがわかった（上表）。その中でも中国人留学生の数は群を抜いて多く、全体の半数以上を占めていた（下表）。

早稲田大学が中国でとても人気であるのには、清王朝の時代から積極的に留学生を受け入れ、中国共産党の創設メンバーを輩出したこと等、他にもとても興味深い理由があったが、ここではあえて割愛する。

Top20 Countries and Regions As of May 1, 2018

	Students	Percentage	Name of Country / Region	
1	3,127	54.07	China	中国
2	819	14.16	Republic of Korea	韓国
3	391	6.76	Taiwan	台湾
4	294	5.08	United States	アメリカ
5	107	1.85	Indonesia	インドネシア
6	106	1.83	Thailand	タイ
7	64	1.11	United Kingdom	イギリス
8	62	1.07	France	フランス
9	61	1.05	Viet Nam	ベトナム
10	60	1.04	Hong Kong	香港

出典：早稲田大学 留学センター「外国人学生在籍者数」

6. 転機となった早稲田留学・大学3年後期で日本に来てから現在まで

前述の通り、早稲田大学で日本語を学ぶことになった彼女は、そこでの1年が日本語に対する考え方を大きく変えたと語る。日本に来る前は、せっかく日本語専攻なのだからとりあえず日本に行ってみて、帰国後に中国で文学などの仕事を探す、ということに決めていたが、紆余曲折あって日本語が好きになり、日本語教育を学びたいと思うほどになったので、この授業を履修するに至った、という次第である。

日本に来るまでは、教科書でしか日本語を勉強してこなかったもので、

その日本語が全く通じず聞き取れなかったことに大きなショックを受け、日本語でコミュニケーションをとることに恐れを感じながら、ほとんど察から出ない閉鎖状態が2,3ヶ月続いたそうだ。

しかし、本人がその期間で最も良かったと思う行動は、しっかり授業に参加したことだという。その授業内容が、主に日本人学生にインタビューするというもので、確かにその時の彼女にとってはかなり効果的であるように感じる。初めて行ったインタビューのことを彼女は鮮明に覚えており、次のようなものだったという。それは日本文化の授業で、ちょうど春だったから、桜などの春の季語についてどう思うか日本人にインタビューするというもので、大学構内のおそらく大隈重信像の前でたくさん学生がいる中、30分ほど声をかけられずにいたところ、ある1人の暇そうな女子学生を見つけ、声をかけたら快諾してくれて、めでたくレポートが完成したときはかなりの喜びがあったそうだ。

そのインタビューを経てからは、だいぶ事態が好転していったようだが、それ以前のまた別の話も話してくれた。大学の近くにドラッグストアがあり、そこで会計をするときに「ポイントカードをお持ちですか？」と聞かれたのが、何かを持っているか聞かれているのはわかるが、どうしてもポイントカードという単語が聞き取れなかったという。自分もそのような本来の英語とはかけ離れた、いわゆる「カタカナ語」があまり好きではなく、英語話者にも通じないのだから、意味がわからなくて然るべきだと思う。話を戻すと、それが原因でドラッグストアにも行きたくなくなっていたらしいが、同じプログラムで中国から来た友人と再度ドラッグストアに行く機会があり、またポイントカードを持っているか尋ねられたそうだ。そのときたまたま同じ列に中国人のおばさんが並んでいて、「自分が持っているこのカードのことよ。」と言って説明してくれてからは、ドラッグストアのことを恐れなくなったという。

たいていの授業は、最初のインタビューのような簡単なレポートを書くだけだったそうだが、1つだけとても難しい授業があり、それは敬語の授業で、ある特定の業界を選び、そこで用いられる敬語について60分のインタビューをし、それを録音して文字に起こしてから考察を書くというものだったという。しかも教授からのフィードバックを受けながらそれを3回繰り返すのと、インタビュー相手を自分で見つけるという点が難しかったそうだ。それでも、他の生徒が茶道などの

業界人にインタビューする中で、彼女は普通のサラリーマンにインタビューをすることになったらしい。初めはYahoo!でサラリーマンの探し方を検索したそうだが、出てこなかったのも、それ以前に登録していた中国人と日本人の交流サイトで知り合ったサラリーマンにインタビューしたという。インタビュー時はとても緊張して、録音をし忘れてもう一度やり直すことになったらしい。しかしそのインタビューを通じて、それ以後気楽に日本語を話せるようになったそう。というのも、日本人は行間を読むというか推測をするのが上手だと感じ、こちらがあまり上手く話せなくても、ある程度は察してくれるのだと思うと、日本語でコミュニケーションをとるのが怖くなくなったらしい。

こうした授業のおかげで、日本語が好きになってきた彼女は、積極的に留学生たちのイベントに参加したという。自分たちで台本を書いて演劇をやったり、他にも、無人島に3つだけ道具を持ってくるとしたら何を持ってくるか議論するというおもしろい授業を受けたりして、楽しんでいたそう。そうして授業で出された課題を楽しみながら、1年間無事に修了して、成績は全てAだったらしいので、すごいと思う。

7. まとめ・考察

当初は、彼女の日本語がとても流暢であり、また彼女は特定の言語に対して好悪が無くツールとして捉えていると話していたので、本課題である”ことばに対する思い”のような話を引き出しにくいのではと感じていた。しかしインタビューを重ねていくと、日本語習得に際し、とても苦労したことなどを語ってくれ、その経験によって現在では日本語がほぼ自由に扱えるほど上達していると言われたので、その意味で、ことばに対する思い、感情の変化などはとても言語学習において役立っていると言えるという一定の所見を得た。そのような理屈を抜きにしても、いろいろな巡り合わせで日本語を学びたいと思うようになり、実際に日本にまで来ているので、彼女はこれからの人生を日本語とともに歩んでいくことだろうと思う。

日本語教育論Ⅱ レポート

教員名：牲川 波都季

氏名：畠中博晶

テーマ「自主性とオリエンタリズム」

1. はじめに

このレポートでは、私のインタビュー相手である沈さんのことばの旅について記述した。前半では沈さんの旅を通時的にまとめて、次に、その過程で気になったことについて深掘りし、標準語・関西弁に対する見解の違い、「読む」「書く」「話す」「聞く」のどれに思い入れがあるかについて聞いた。最後に、私の言語経験と比較し、沈さんのことばの旅において特筆すべきは「自主性」と「オリエンタリズム」であるということがわかった。

2. 日本語を勉強し始めるまで

沈さんは上海の生まれだ。上海の中では最も西で、比較的郊外の場所に生まれたという。父や母とは友達のような仲の良さだそうだ。沈さんの第一言語は母語として自然と身に着けた上海語である。沈さんが初めて母語以外に触れたのは小学校3年生の英語の授業だそうだ。中国は日本とは違って、小学校でも教科の専任の先生がいるらしく、英語の先生から習ったそうだ。しかし、日本に留学しに来てからほとんどわすれてしまったようだ。また小学生の時に、中国語に吹き替えされた日本のアニメにハマりはじめる(中華一番・カードキャプターさくらなど)。「日本語」ではないが、本格的に日本の文化に触れた最初の経験だと思われる。中学2年生からは吹き替え版ではなく日本人の声優が声を当てている日本のアニメを見始める。そしてついに高校1年の時、日本語の五十音を覚えた。もちろん誰かに強制されたわけでもなく趣味であるし、五十音をすべて覚えるまでひどく時間がかかったという。これが沈さんの日本語の旅の本格的な始まりである。

3. 日本語を勉強し始めてから、留学を決意するまで

高1のときに五十音を覚えた沈さんであるが、もちろん趣味の勉強であり(そもそも本格的にやるつもりはなかった)、受験で忙しいのもあって、高校の時はそこまで体系的に勉強したわけではなかった。沈さんが日本語を教育機関を通じて体系的に勉強し始めるのは大学1年生の時に日本語を第二外国語として履修してからである。ここで第二外国語というところに注目してほしい。中国から日本への留学生はたいてい日本語を専攻としている場合が多いと思われる(特に文系、私の主観であるが)。沈さんは大学では考古学を専攻しており、日本語は専攻ではなかったのだ。高校3年生の頃、日本語を専攻しようとも考えたが、当時ロシア語を専攻したいとこのお兄さんに「一つの言語をわざわざ4年もやるのはもったいない」と言われて考え直したそうだ。大変示唆的である。だから沈さんはあくまで専攻とは別に日本語を勉強(より自主性が強くなるであろう)して日本に留学してきたわけである。しかも、1年から体系的に勉強することになったのだが、沈さんはいわゆる寝ブッチを日本語の授業でしてしまうことも多かったそうだ。それなのに大学2年の時には日本語検定N2を獲得(本人いわくほぼ自学)しており、このことから沈さんの日本語に対する、「誰かから教えてもらって学ぶ」というよりは「自主的に学んでいく」という姿勢が伺える気がした。日本語の授業は、1回配当の授業は30人、2回配当の授業は10数人、3回配当の授業は5,6人といった感じだったそうだ。3回の頃になるとさすがに人数が少なすぎてサボりずらなくなった、とのことだ。日本語の授業をしてくれた先生は、日本から帰ってきたばかりの中国人で、沈さん曰く日本人のおっさんのイメージにかなり近かったそうだ。沈さんの日本人のおっさんのイメージは、ちょっとやな感じで、細くて身長も低いといったイメージだそうだ。

3-1. 日本語のイメージの変化

大学に入ってから日本語を体系的に学び始めた沈さん。体系的に学んでいく中で、日本語のイメージと実態が離れていたことに気づくことになる。そのきっかけは敬語の存在である。日本語を第二外国語として勉強し始めて初めて、沈さんは敬語の存在を知った。そもそも沈さんが好きになった日本語は、男性的な話し言葉の日本語であり、敬語のような日本語は沈さんのイメージとは違って、またそれは沈さんの目にはめんどくさく思えたとのことである。

4. 留学を決意

沈さんは大学4回生の時に日本への留学を決意する。留学は大学3回生の頃から考えていたそうだ

が、中国での就活が大変で、どうせなら日本で勉強してみようという気持ちが強くなったからだ。その時から、沈さんの中で日本語の重要性が高まった。両親はあまりその決定に介入せず、「好きなようにやれ」と言ってくれたということだ。それから、半年のギャップイヤーを取り、伏見の日本語学校で1年勉強したのち、大学院入試に受かり、(院試の専攻は考古学として)今の沈さんがあるのだ。日本語がどんどんわかってくるうちに、日本語に対する特別な感情は消えたそうだ。日本に留学してからは、日本語の番組はあまり見ることはなくなり、中国語のバラエティ番組やドラマを見るようになり、帰りたいと思うことすらあるとのことだ。それでも、話を聞いている感じでは日本の声優さんたちに対する愛情は変わっていないとかがえたとし、当時は聞き取れなかった日本語のアニメを見返して、「なるほど！」となることもあるそうだ。

5. さらなるインタビュー

前節までは沈さんの言葉の旅を通時的に追うことができた。ここからは、それを踏まえて私が気になったことについて沈さんに聞き、それをまとめたものである。私が気になったことは、「沈さんが習ってきたのは主に標準語だが、沈さんが日ごろ触れているのは関西弁であり、沈さんの言葉への思いは関西弁と標準語でどう違うのか」ということと、「沈さんが思い入れのある部分は、日本語の「書く」「読む」「話す」「聞く」のどの部分なのか」ということだった。

5-1. 標準語、関西弁という対比から沈さんの旅をとらえなおす

沈さんが初めて標準語と出会ったのは中学生のときに日本のアニメを見始めてからだ。その後、高校1年生の時から趣味で日本語の五十音を覚え始める。そして、大学の第二外国語で日本語を履修する。大学を卒業してのち、半年のギャップイヤーを経て京都の伏見にある日本語学校に通う。この日本語学校で教えられるのは標準語である。ここで1年間勉強したのち、沈さんは大学院入試を受験し、合格して今この大学に通っている。

5-1-2. 関西弁との出会い

沈さんと関西弁の出会いは想像以上に早かった。というのも、沈さんが見てたアニメにはいわゆる関西弁キャラが存在していたからだ。例えば、コナンの服部平治や、カードキャプターさくらのケロちゃんなど。アニメの関西弁に触れつつ、実際の関西弁によく接するようになったのは大学院入学以降のことであるそうだ。日本語学校は京都の伏見にあったが、地元の人との交流はさほどなかったからだという。

5-1-3. 沈さんの中の関西弁への価値観

沈さんの関西弁に対する価値観(沈さんの関西弁の旅)を聞いたところ、関西弁がすき、かわいいな、という漠然としたイメージがあるとのことだ。沈さんはそもそも大都会があまり好きではなく、大都会ではない言葉である関西弁に対して好印象を持っているようだった。またそもそも関西弁のアニメキャラによって関西弁に対する肯定的なイメージを持っていたらしく、沈さんの関西弁についてのイメージは肯定的なまま推移していることがわかった。

5-2. 沈さんが思い入れのある「聞く」日本語

関西弁の話に続いて、沈さんの日本語の旅において、「書く」「読む」「話す」「聞く」の4つのうちどの日本語に本人的に愛着があるのかを聞いてみた。本人曰く、「聞く」日本語に愛着があるとのことだ。というのも、声優さんの声が好きだからとのことだ。日本語が理解できるようになる前から、字幕がないのに声優さんの動画や声を聞くことも多かったそうで、沈さんが日本語を勉強するモチベーションもそれを理解するためというところが大きいとのことである。日本語が理解できるようになってからそういった動画を見返すことはあるそうだが、「なるほど！」となることはあっても、もともと抱いていた声優さんの動画や声に対する好きという気持ちは変わらないそうだ。

6. 私と比較して

沈さんは日本語を勉強するにあたって、大学の授業を自主休講したり、日本語を教えてくれた大学の先生にいいイメージを持っていない。一方で私は、地震が起きたときとゴキブリが家に出たときを除いては、アラビア語の授業を休んだこともないし、アラビア語の先生に対していい印象を持っていて、アラビア語の先生の存在がアラビア語の授業を取る一つのモチベーションとなっている。またそれゆえ沈さんは日本語を勉強するときに、自学による部分が大きく、日本語検定試験合格も自学によるものであった。一方私はアラビア語の勉強はそれをやらないと授業でついていくことができなくなる輪読のテキスト以外はず、何を勉強するかは完全に受け身である。このように違う所もある一方で、日本語がわかるにつれて日本語に対する特別な感情が消えてしまったという所は、私も似たような感情を覚える。アラビア文字を

書くことすらやっただった大学1回生の頃に比べれば、アラビア語がわかることそのものに対する喜びはかなり薄れてしまったと感じる。私もアラブ諸国への留学を一時期考えたが、今アラビア語が楽しいからという理由それだけで行く気には到底なれない。この特別な感情というのはオリエンタリズムが関わっていると考える。中国語話者からみた日本語と、日本語話者からみたアラビア語では、その馴染みのなさの度合いが相当違うとは思われるものの、両者ともにオリエンタリズムのまなざしが向けられていることは間違いないだろう。そう考えると、ロマンが詰まっている何かを知りたいという根源的な欲求によって、言語学習(の特に初期)は支えられているのかもしれない。一方で言語学習を長期間に渡って継続させるためには、ただのオリエンタリズム的な欲求で終わることのない学習意欲を自ら見出す必要があるのかもしれない。私の研究室には留学生が多く、イタリアから来た留学生の人と話したとき、その人は「日本語はアニメ文化の影響で勉強する人が多いが、大抵は漢字がつかずすぎてすぐやめてしまう」という話をしていて、日本語はその文化的背景もあってオリエンタリズムを抱かれやすい言語であろう。沈さんのことばの旅や、留学生の経験を、日本語教育学の視点で考えると、一過性のオリエンタリズムではなく、それを契機として持続可能な日本語学習の楽しみを味わうことのできるような指導が望ましいということがわかった。

7.おわりに一では持続可能な指導とはなにか―

今回のレポートでは、まず沈さんの旅を通時的にまとめて、次に、その過程で気になったことについて深掘りし、最後に、私の言語経験と比較し、沈さんのことばの旅において特筆すべきは「自主性」と「オリエンタリズム」であるということ指摘した上で、日本語学習について持続可能な指導が必要であると述べた。では、持続可能な指導とはなにか。私は日本語教育のプロではないので詳しいことはわからないが、一つ具体例を挙げるとすれば、本人の興味に応じたコーパスに基づいて漢字を習得させることだろう。国際交流基金(2009)によれば、日本語学習者の学習の目的として、「マンガ・アニメ等に関する知識」が50.6%、「歴史・文学等に関する知識」が47.6%である。具体的に目的が決まっている人に対して、一般的な日本語の漢字を教えるのは大して意味のないことのように思われる。アニメやマンガに関心のある人に対しては、漢字一文字一文字の訓読みや音読みを教えるよりも、「作画」「監督」「原作」といった単語を、歴史・文学に関心のある人に対しては、「随筆」「主題」「鎮護国家」といった単語を教えたほうがよいのではないだろうか。そういう関心・興味別のコーパスが整備されているかどうか私は知らないが、あったらそれを使って興味・関心を持続させることが日本語教師のすべきことであると思うし、整備されていないのだとしたらそれを整備するのが研究者・文化庁の責務であるように思われる。

8.参考文献

国際交流基金(2009)『海外日本語教育機関調

査』https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey_2009/2009-06.pdf(2019年1月11日閲覧)

「ことばとの旅」

—変化していくことばへの気持ち

人間・環境学研究科
文化遺産学 M1 沈嘉軼

1. はじめに

すべての言語には習得の過程があり、そして人には誰でも自分のことばを持っている。ことばは様々な形で毎日欠かさず私たちに使われ、生活に影響を与え・生活から影響を受け、人と人をつながっている。本稿では、異なる国の二人のペアインタビュープロジェクト「ことばとの旅」を通じ、人とことばの関係について考えたことを述べる。

まず、インタビュー相手の基本情報を紹介する。相手は、京都大学総合人間学部3回生の畠中博晶さんである。彼は東京新宿出身で、専攻は理論言語学である。第一言語は日本語、第二言語は英語、第三言語はアラビア語である。高校の時は放送部だったが、大学には記事を書くサークルに入り、漫画に関する記事を書いている。趣味は旅行であり、すでに42/47の都道府県をまわったことがあり、そのうちひとり旅の場合が多い。

2. ことばとの旅

2.1 母語と方言

2.1.1 標準語

畠中さんは東京出身、そして大学までずっと東京にいたので、生まれてから日本語の標準語を使っている。お母さんは宮城県出身だが、お父さんは東京出身のため、両親も家で標準語のみ話すのである。

2.1.2 方言との出会い（東北弁と関西弁）

大学からは、畠中さんのご両親がお母さんの実家宮城県に引っ越し、お祖母さんと一緒に住むことになった。家では無意識的に方言と標準語を混ぜて話しているが、東北弁には「なまりがうすい」と言った。彼によると、おばあちゃんのことばは分かるが、隣の農家の人たちのことばが分からない場合がある。その原因は、おばあちゃんのことばに標準語が話せる親しい人がいるに対して地元の間は方言しか話せないことにあると思われる。

大学は京都にあるが、関西弁はもともと日本に通じやすい方言だと思っている彼は、関西弁は大体分かると言った。それは聞くのことだと思い、実際に使う（話す）ことはどう

だろうかを聞くと、彼は自然に学校の友達やアルバイト先の同僚などに影響され、基本的には敬語を使う時何故か関西弁になってしまうだそう。その原因は、大学に入ってから敬語を使う場合が一時期に増えた時期に関西弁に接触したためにあると考えられている。そして、実家に帰る時も、時々関西弁を混ぜて言ってしまうことがあるとのことである。

私は両親とも上海出身なので、自然に方言を身に付け、小さい頃から家でずっと方言で話している。上海語と言っても、区域によってアクセントが違う（差が大きい場合もある）ので、いわゆる上海語ができるが、自分の母語としては認めていない。「普通話普及政策」や人口の流動などによって、今のこともは方言が話せないあるいは話したくない人がますます多くなっている。非常に残念なことである。

畠中さんと同じように、私も大学から故郷を離れ、湖北省にある武漢大学に進学したが、北京や東北の友達が多いため、常に標準語と武漢や中国北方の方言を混ぜて使うようになった。

2.2 英語との出会い

畠中さんによると、日本の英語教育は基本的には中学校1年から始まるだそう。大学は1、2回生の時英語の授業があったが、それからは英語を勉強していない。しかし、今でも英語が第二言語であることは変わっていない。

私も大学2回まで英語を勉強していたが、日本語が英語の代わりに第二言語となっている。この点については、後で詳しく説明する。

2.3 アラビア語との出会い

最初にペアを組んだ時、畠中さんはアラビア語ができることにびっくりした。アラビア語は難しくて全く分からなく、やっている人もないので、また歴史的な原因も加え、ちょっと神秘的な言語だと思う。そのようなことばは人にどのような影響を及ぼすのかを軽くインタビューした。

2.3.1 始めたきっかけと授業について

畠中さんは大学1年の時アラビア語を学び始め、今も週に1コマ授業をとっている。3回になると、学生5人しかいないので、とっても贅沢な授業の時間を楽しんでもらうと言った。始めたきっかけはたまたま同じく京都大学にいる高校の友達が京大はアラビア語の授業

があると教えてもらった。もともとアラビア中世の文化に興味があるので、試しに授業をとったということである。

先生は研究者ではなく、元駐モロッコ外交官だそうだ。もう一人ネイティブの先生と一緒に授業をやり、しかもその人は変わる（京大あるいは同志社大の留学生の場合が多い）と聞いた。授業の内容は、初級の時は言語の勉強ではじめ、だんだん中級になると、イスラム文化など文学的な講読に変わっている。1対5の授業なので、何か質問があれば、すぐに先生に教えていただけることから贅沢さを感じているのである。

2.3.2 精神の支えとしてのアラビア語

島中さんは授業の内容より授業の時間が好きなので、毎週90分の時間がすごく楽しみにしており、難しいだが勉強が続けられるということである。そして、先生の背景が違うため、「何か見えてくるのか」の期待感を持っている。

また、予習や復習をする時、非常に集中しなければならないので、ほかのことを考えられないあるいは考えなくてもいいまで言える。本人は京大が面白くないなどの良くないことを考えせずすなわち「現実逃避」のようなものとしている。

2.3.3 日本人アラビア語学習者として

何かほかの言語を学ぶ考えがあるかどうかを聞いてみると、アラビア語の勉強が結構時間かかるからほかの言語をやると趣味やほかのことをする時間が減ると言った。今後時間があったらやってもいいと思われているが、今はほかの特に興味がある言語はないらしい。「むしろ将来はアラビア語を使ってほかのことをやりたい」（例えば日本でガイド）と思うのである。

中国人日本語学習者としての私は、日本語を使う仕事をするなら中国より日本での方がいいと思う。それが考え方の相違でもあり、ことばに対する価値観の一つの相違点でもある。

2.4 旅行中のことばとの出会い

2.4.1 面白いと思うことば

島中さんは、青森県五所川原市のお祭りのパンフレットに「五所川原人」と書いていることに感心した。話を聞くと、日本人は自我介绍の時は〇〇県出身、多くでも〇〇エリアまでしか言わないのが普通だが、青森県民ではなく、津軽人でもなく、わざと「五所川原人」小さな区域でそういう言い方が面白いと思った。しかも五所川原市の住民は5万人し

かないので、よほど自分の町への愛着が強いと感心した。

2.4.2 分からないことば

鳥取県の温泉で、番台のおばあちゃんたちがなにを話していたのかが全く分からなかったということがあった。すごくびっくりして、生まれて初めてこれは日本語か、ここは日本かと感じたので記憶に残っているとのことである。このような状況はしばしば起こるのだが、残念ながら、分からないのままの場合が多く、聞き取れないため調べようとしてもできないのである。

3. 畠中さんとことば

畠中さんの母語は標準語で、大学まで触れていないお母さんの母語である東北弁が少しできるが、なまりや馴染みが薄いようだ。関西弁も周りに影響され、敬語を言うときに使うだけ、特別な感情はないようだ。一方、私は方言が全般的に好きで、特に母語としての方言を非常に大切にしている。地元の泥臭い方言には元があると思い、その影響は決して消せないのである。

また、畠中さんは旅行がお好きなので、本来はこの部分の内容が最も豊富であろうと思ったが、この二つのエピソードしか思い出せないので、聞くのをやめた。普段は自分にとって当たり前のことをあまり気を付けない人のほうが多いのであろうと考えている。自分も誰かに言われたら、「本当だね」と気付く場合が少なくない。「当たり前のことを考えずに」も人間とことばの関係の一つではないかと思う。

英語については、畠中さんも私も今ほとんど使わないが、日本語アラビア語の辞書がないので、英語でアラビア語辞書を引いていると聞いた。それで英語の勉強にもなるではないかと思う。そこで、注目したいのは、畠中さんにとって、アラビア語は英語より学生生活の大きい割合を占めているが、使うのはまだ英語の方がうまいということである。ことばの重みづけと実際に使う順番が必ずしも一致しているとは限らないことをここで初めて考えた。アラビア語が難しく、文法的に英語と全く違うこともあって、なによりアラビア語そのものより今はただアラビア語の授業が好きだから勉強を続けているので、そんなにうまくなくてもいいという考えはあるではないかと勝手に考えている。要するに、アラビア語学習のモチベーションが変わったということである。分かるとともに、知らない言語に対する特別な感情が消えてしまったところは私と似ている。

4. 外国語学習について

英語について、私は小学3年から日本に来る前まで勉強していたが、基本的には試験のためだったので、あまり好きではない。日本語を学び始めた以来、特に日本に来てから、日本語が徐々に英語の代わりに第二言語となった。畠中さんが私の英語と日本語との相性が悪いの意見に同意した。ちなみに、畠中さんは中国の英語教育は小学校から専門の英語の先生がいることにびっくりしたようだ。

日本語はアニメ好きゆえわりと早いからしばしば触れていたが、本格的な学習は大学で第二外国語としてからである。しかし、畠中さんはアラビア語の授業を休んだことがないに対して、私は日本語に興味があるが、授業の時間が嫌いだったので、恥ずかしながら授業をよくサボり、初級は基本自学で勉強してきた。自学と言っても、本気でやっていたわけではなく、アニメや声優さんの声や動画（字幕がない）で日本語を楽しみにしているだけだった。そのため、基礎がよくできていなく、今でも困っている。いまさらもう一度やり直すのが難しいと思う。

しかし、今は日本に留学しているため、日本語が研究にも生活にも深く関われ、さらにもうまくできなければならないのが現実である。要するに、本来ただの興味としての日本語は道具のようなものとなっている。また、今の一人生活が寂しいので、嫌いになったわけではないが、日本語があまり耳にしたくないのも事実である。アニメや漫画などを見るのが大きく減っており、中国のバラエティー番組を見るようになった。以前はこのような状況が全く思えなかった。何らかの安心感を求めているかもしれない。しかし、これは必ずしも悪いこととは思わない。好きや興味があるなどの気持ちだけで言語の習得を進めることが難しい。外国語教育において、学習意欲をどのようにして出させるのかを考えなければならない。モチベーションを考えたらうえて、学生の多様性に応じ、柔軟な計画が必要である。何のための勉強でも良い、大切なのは続けられることである。

5. 人とことばの関係

前文で何を言いたいかというと、人とことばの関係は変化していくものだと思う。言語習得の違う段階で、ことばに対する気持ちや重みづけもともに変わっていく。「ことばの旅」というのは出会いだけではなく、「変化」の意味を含め、ことばに対する価値観を表している。

授業中のディスカッションで、やはり人は自分のことばに愛着を持つだと強く感じた。

ことばは人に「ちから」（ポジティブな影響）を与えるだと思う。また言語は多様性と複雑性を持ち、人とことばのつながりの形も様々あるため、人とことばの関係はことばへの重み付けやことばに影響された考え方だけではなく、ことばの価値は文化そのものに、そしてことばを使うそのひとにある。人間の発展はことばが生まれてから急速に進行したのだ。したがって、ひととことばは不可分離なのである。グローバル化がさらに進行する状況の中で、ことば（方言を含め）の成り行き、言語学習過程のそれぞれの段階の中でことばと人間の関係をちゃんと考えなければならない。

まとめのことば

牲川 波都季

ことばのと旅は、人それぞれ
どんなことばと出会い、学んできたのか。
そのことばにどのような思いがあったのか、あるのか。
そのことばによって、何をしたかったのか、したいのか。

日本語教育の教室で担当者になったとき、目の前の学習者がたどってきたことばとの旅はさまざまです。

しかし、私が担当者として一貫して目指していることは、日本語などの新しい言語を学び使うことで、未来に向かってなにか「よい予感」をもってほしいということです。言い換えれば、ことばを学び使うことへの希望を育てたいのです。

ことばを学び使うことへの希望を育てることは、学習者が自分で特定の言語の学びを進めていく源になります。そしてこの希望は、さらに別の言語を学んでみようと思うきっかけにもなるでしょう。また、ことばを使うことで、他者や他者からなる社会を変えていけるのだという、言語化すること全般への希望にもつながります。

こうしたことを可能にするためには、その人の「ことばとの旅」、その人が考え生きてきた過程、そうした人それぞれの多様性・可変性・複雑性を前提にした上で、学習者がこの教室で言語化したい（言語化せざるをえない）テーマを探り出すことが重要です。

一つの教室として大きなテーマを設定し、お互いが語り合い書き合う共通の基盤は保持しつつも、一人ひとりの違いも最大限発揮できるテーマ設定です。違いがあるからこそ、自分の考えを伝えてみようという気持ちになりますし、違いがあるからこそ、反ってきたことばから新たな発見もあります。

実際の教室活動では、そうした互いの言語化を支援し促すことが、日本語教育に限らず、言語教育者の重要な役割となります。もう少し具体的に言うと、この場では、自分のあやふやで間違っているかもしれない考えを言語化してもよい、その言語の形式がたどたどしくても問題ないと思ってもらえるかどうか。考えが曖昧で言語の形が間違っていたとしても、とにかく言語化したほうがほかの人の意見が聞けてもっと面白いことが起こると思ってもらえるかどうか。このプロセスの中で、学習者の考えも言語の形も変わっていきます。

この授業の目的は、人の「ことばとの旅」の多様性・可変性・複雑性を知ってもらい、教室で出会う日本語学習者が、それぞれにまったく異なる言語観や言語学習観、目的をもって集まっていることを知ってもらうことでした。それを知ったうえで、言語教育者が、自分自身の教育の目的をもって、どうかかわっていくべきなのかを、今後は考えてほしいと思います。

と同時に、この授業のもう一つの目的は、「ことばとの旅」という大きなテーマを共通の基盤としつつ、個別性を活かす言語教育の活動を実体験してもらうことでした。みなさんは、今学期を通し、ことばを使うことや学ぶことに何か少しでも「よい予感」を感じとれたでしょうか。

変則的な授業日程と休講などで、十分な支援が行えなかった部分もありますが、こういう日本語教育・言語教育もあるということを経験の片隅にとどめてもらえれば幸いです。

なお、こうした活動型の日本語教育（言語教育）は、みなさんのような、上級・超級レベルの言語使用者に限らず、ごく初級からも始めることができます。関連文献を挙げます（一部は、昨年の日本語教育論1でも配布）。

庵功雄氏の「やさしい日本語」の初級をめぐる議論も、間接的に関りがありますので、ぜひ調べてみてください。また、私は最近、そもそもことばを使って他者に働きかけようとする意志がどこから来るのかということに興味があり、秋田県の農家さんの他者認識に注目しています。こちら関連文献リストを見てみてください。

では、これからも、よい「ことばとの旅」を！

関連文献一覧

理論的背景

細川英雄 (2002). 『日本語教育は何をめざすのか一言語文化活動の理論と実践』 明石書店.

細川英雄 (2012). 『「ことばの市民」になる一言語文化教育学の思想と実践』 ココ出版.

牲川波都季 (2011). 「表現することへの希望を育てる—日本語能力教育と表現観教育」『早稲田日本語教育学』 9, 73-78.

実践例

牲川波都季・細川英雄 (2004). 『わたしを語ることばを求めて—表現することへの希望』 三省堂.

* 日本語第 1 言語話者対象。高校で行った日本語表現教育

牲川波都季 (2011). 「他者の固有性を発見する—「多文化コミュニケーション入門」の理念と設計」『秋田大学教養基礎教育研究年報』 13, 43-58.

* 日本語を第一言語とする学習者としめない学習者の合同クラス。日本の大学の教養科目

牲川波都季 (2013). 「「よい予感がする」表現教育—2 日間のクラスが残したもの」細川英雄, 鄭京姫 (編) 『私はどのような教育実践をめざすのか一言語教育とアイデンティティ』 春風社, 73-90.

細川英雄+NPO 法人「言語文化教育研究所」スタッフ (2004). 『考えるための日本語—問題を発見・解決する総合活動型日本語教育のすすめ』 明石書店. ★

* 初級の日本語学習者を対象とした例もある。

細川英雄編著 (2007). 『考えるための日本語 実践編—総合活動型コミュニケーション能力育成のために』 明石書店.

秋田の農家関係

市嶋典子 (2014). 「農業従事者と留学生の接触場面に関する—考察—農業体験における調整行動に注目して」『秋田大学国際交流センター紀要』 3, 1-13.

<https://core.ac.uk/download/pdf/144189806.pdf>

牲川波都季 (2013a). 「誰が複言語・複文化能力をもつのか」『言語文化教育研究』 11, 134-149.

<http://hdl.handle.net/2065/38977>

牲川波都季 (2013b). 『農家に学ぶ留学生受入の思想と方法—秋田県仙北市西木町のグリーン・ツーリズム事例集』 秋田大学国際交流センター. <http://segawa.matrix.jp/dat/leaf2016.pdf>

牲川波都季 (2014). 「留学生農家民泊活動報告—農家民泊 5 年間—秋田県仙北市西木町にて」『秋田大学国際交流センター紀要』 3, 53-82. <http://hdl.handle.net/10295/2373>

牲川波都季 (2018). 「グリーン・ツーリズム運営農家 A 夫妻の他者認識—伝え合いの意志が生まれるところ」『言語文化教育研究』 16, 96-114. http://alce.jp/journal/dat/16_96.pdf

ことばとの旅—クラスメートから知ることばと人の関係

2018年後期 日本語教育論Ⅱ・2 レポート集 Web公開版

発行日 2019年3月20日
編集・発行 京都大学人間・環境学研究科/総合人間学部
牲川波都季（講師（非常勤））
問合わせ先 牲川 波都季 segawa@kwansei.ac.jp
